日本中國學會便り

2008年（平成20年）
12月20日
第２號
（通巻第14号）

［事務局からのお知らせ］

彙　報

第一回理事会（５月17日開催）での決定事項を受け、５月28日付で通信による臨時評議員会が開催されました。審議・報告事項は以下の通りです。

・丸尾常喜会員の顧問への就任について
顧問推薦規定にもとづき、丸尾常喜前理事長（故人）の顧問就任（平成20年４月１日～５月７日）が決定しました。
・日本中国学会賞受賞者の決定についての報告
［哲学・思想部門］該当者なし
［文学・語学部門］藤原祐子「『草堂詩餘』と書會」（『日本中国学会報』第59集掲載）
・新入会員の承認
第一回理事会で決定した新入会員（通常会員25名、賛助会員１社）の入会が承認されました。

また、10月10日の評議員会における報告及び決定事項は次の通り。

［報告事項］
（１）　平成21・22年度評議員・理事長選挙の結果について
（２）　平成21・22年度副理事長・理事の委嘱について
（３）　監事選挙の結果について
（４）　顧問・特別会員・物故会員について
（５）　平成21年度学会報編集担当校、学会展望担当校、大会開催校について
『学会報』編集担当校　　神戸大学
学会展望担当校　　哲学／北海道大学
文学／お茶の水女子大学
語学／神戸市立外国語大学
大会開催校　　文教大学
（2009年10月10日（土）・11日（日）開催）
（６）　創立60年記念事業関係報告
（７）　各種委員会報告

［議決事項］
（１）　平成19年度決算報告ならびに監査報告について
（２）　平成20年度予算案について
（３）　会員動向の確認及び新入会員の承認について
（４）　選挙規約改正について

翌10月11日の総会において、評議員会の議決事項が報告されました。

◎会費の納入について
会費未納の方は、至急ご送金願います。２ヶ年（平成19・20年度）未納の方には、本年度の『学会報』を送付いたしておりません。また、４年間滞納されると、除名になりますので、ご注意ください。郵便為替口座：00160-9-89927

◎退会の通知、住所変更について
退会ならびに住所・所属機関等の変更の際は、速やかに事務局へご通知ください。通知は書面かファックス、もしくは振替用紙の通信欄にてお願いします。

再び理事長職を拝命して
——上海師大中哲創新団体との連携の経過報告

理事長　池田　知久

理事長就任のご挨拶

2008年８月に行われた役員選挙で、図らずも再び理事長の大任を仰せつかり、甚だ困惑しているところである。10月の京都大学大会時における新理事長としてのご挨拶の中で、今日の中国研究の逆境に向かって、会員のみなさんと一致協力して何とか対処していきたいという趣旨のお話を申しあげた。

その時、実行可能な具体的テーマとして挙げたものは、次の３点であった。——（１）電子化をさらに推進することなどによって、学会本部と会員諸氏との間を結ぶ諸媒体（『日本中国学会報』・『日本中国学会便り』・ホームページ）をより親近なものにすること。（２）学部学生・院生・助教などの次世代あるいは若手研究者のエネルギーと意欲を汲み出し、それをバネにして日本の中国研究の一層の活性化を計ること。（３）近年の日本の中国研究はかつて有していた国際的影響力を失いつつあるが、過去のそれの回復を通じて世界の中国研究のレベルアップに貢献すること。

大風呂敷を拡げすぎた嫌いがあるが、ここでは（３）に関連して、現在、本学会が進めつつある上海師範大学中国哲学創新団体（責任者は方旭東教授）との連携による、『日本中国学会賞受賞論文集』（仮称）の出版計画の途中経過をご報告したい。

上海師範大学中国哲学創新団体との連携

さて、今年３月28日のことであるが、上海師範大学哲学系内の「上海師範大学中国哲学創新団体」責任者、方旭東教授（主な専攻は宋明理学と聞いている）より池田のところに、同教授が主宰する同大学の公的研究プロジェクト「海外中国哲学論叢」の一環として、「海外中国哲学論叢系列論文集」を出版したいという申し入れがあった。この目的のために同プロジェクトは、すでにアメリカの『東西哲学』（Philosophy of East and West）と連携して、中国語に翻訳した論文集１冊を上海で出版する計画（学術顧問はハワイ大学のロジャー・エイムズ教授）が進行中であり、他にアメリカでは、『中国哲学年報』（Journal of Chinese Philosophy）と『比較哲学雑誌』（Dao: Journal of Comparative Philosophy）とも連携の交渉中である、ということであった。

日本では、池田を通じて『東方学』と『日本中国学会報』にこの話があった。『東方学』のことはさておいて、本学会に対して具体的には、『学会報』掲載の中国哲学に関する研究論文の中から、近10年ぐらいの代表的な高水準の論文を10余篇精選して、それらを同プロジェクトのメンバーが中国語に翻訳し、同プロジェクトの資金で１冊の論文集に編んで中国で出版するという計画であった。中国語の総字数は25万字を超えないものにしたいという条件が付いている。

本学会理事会の決定と交渉の経緯

本年度第１回理事会（2008年５月17日）で審議した結果、本学会はこの申し入れを受けて同プロジェクトと連携することになった。そして、『学会報』の学会賞受賞論文の内、中国哲学部門の第２回（1971年。第１回は1970年であるが該当者なし）より最近回（2007年）までの全論文を、本学会における中国哲学の研究を代表する高水準の論文として掲載するよう推薦する、という結論に達した。交渉役は池田に委ねられた。

翌５月18日、私はこの理事会決定を方旭東教授に伝えると同時に、本学会側の希望として、中国哲学の受賞論文は合計27篇であるが、物故者が３名いるのでそれを除いて、残る24篇を推薦したい、この内、著者が承諾するものを全て掲載してほしい、と提案した。６月２日、方教授より返報があり、基本的に

日本中国学会側の提案どおりでよいが、あらかじめ全論文題目に目を通したいという要請が寄せられた。そこで、ホームページ委員会の渡邉義浩委員長と仙石知子委員を煩わせて、物故者３名の論文を含む合計27篇の題目一覧表を作成していただき、６月16日に方教授に送った。

６月24日、方教授より、24篇の内、３篇は内容が中国哲学ではないので除外して、残りの21篇を掲載したい、と伝えてきた。これに対して、６月26日、私は、この３篇も哲学に関係があるので、除外しない方がよい。また24篇の著者全員が掲載を承諾するわけではなく、不承諾の著者も出ると予想されるので、取りあえずこの24篇全部を翻訳・掲載の候補論文としてもらいたい、と要求した。その後、７月１日、方教授は最終的に、池田の提案に賛成して、本学会側の承諾論文の到着を待つ、ということになった。

受賞論文翻訳・出版の「同意書」の集約

その後、７月１日を過ぎたころ、ホームページ委員会の渡邉委員長にお願いし、上記の趣旨に合致する「同意書」の様式を、法律家と相談して作成していただいた。その様式は、10月５日、受賞者（哲学部門）会員のみなさんの手元に、理事長名の「受賞論文の中国語訳と中国での出版に関するお願い」とともに送り届けられた。なお、９月７日、ご本人の承諾を得て、三浦國雄会員の「資治通鑑考」（『学会報』第23集掲載、1972年の受賞論文）１篇を、見本として方旭東教授に送った。

この「お願い」に対して10月31日までに、物故者を除く24名の受賞者の内、22名の方から「同意書」が寄せられた。その「備考」欄には受賞者のさまざまのご要望・ご意見が記されており、ここでは一々紹介はしないが、以下に述べる中国側との直接交渉の際に議題に上せて大いに役に立った。

以上の３月28日～10月９日の経過は、10月の京都大学大会の理事会・評議員会・総会における理事長報告の中で、簡単にご報告したところである。

「協約」書の合意内容

22通の「同意書」のコピーを携えて、池田は11月５日～７日の３日間、上海師範大学に赴き、責任者の方旭東教授を始めとする哲学系主任の馬徳隣教授、校務委員会副主任の陳衛平教授などといった、幹部の先生方と会見して同大学や哲学系の姿勢・意向を確かめた。そして、特に方教授とは、合計４回に渡り「協約」書の作成について、中国文の条文を一々検討しながら直接交渉を行った。交渉は順調に進んだが、11月26日現在、正確な表現が細かいところまでまだ確定していないので、「協約」書の締結は完了していない。しかし、基本的に大きな問題はないものと考えられる。

余談になるが、方教授は交渉の中で、ご自身、本学会に入会したいとの意思を示された。この時、入会申込書を持っていかなかったのは、私としたことが何とも迂闊であった。また、創立60年CD版『日本中国学会資料（1949年～2008年）』も入手したい、『学会報』のバックナンバーも全てほしい、と求められた。これらの件は、11月12日に帰国した後、15日までに本学会事務局と相談して要求に応えることになった。

また、帰国後、方教授とメールでやり取りしている内に、こちらから優秀な日本語翻訳者を紹介した方がよいということになった。そこで、かねてから知り合いの曹峰氏（清華大学教授）・柳悦氏（首都大学東京博士課程）・王啓発氏（中国社会科学院研究員）・劉岳兵氏（南開大学副教授）、その他日本人２氏を紹介したが、方教授と彼らとの折衝がまだ続いている（11月26日現在）ために、「協約」書の締結がまだ完了しないという状況になっているようである（次の４を参照）。

以下に、この交渉の過程で合意を見ている諸項をご報告する。（これらは「協約」書に書きこまれるものもあれば、書きこまれないものもある。また、書きこまれたとしても、実際の文章はより簡潔な表現になると思われる。この点はご了解いただきたい。）

１．両者の連携による今回の出版の目的は、あくまで学術的なものであり、政治的・宗教的・営利的なものではない。

２．『日本中国学会賞受賞論文集』（仮称）の冒頭に、池田理事長が中国の読者に対して、日本中国学会の紹介と学会賞に関する紹介を簡単に書くこととする。

3．本書の出版は2009年12月までに行いたい。出版社は今のところ、華東師範大学出版社を考えている（変更の可能性もある）。出版部数は未定で、出版社が決めることになるが、2000部前後になる模様である。

4．受賞者による著者校正を１回だけ行う。2009年５月までに校正ゲラを出したい。その２ヵ月後の７月までに、校正モドシを済ませていただきたい。（ただし、方教授と日本語翻訳者との折衝によっては、日程がそれぞれ２，３ヵ月遅れる可能性もある。）

5．著者に印税・原稿料は支払われない。抜刷を作ることは中国の習慣にはないが、１論文につき20部の無料抜刷を方教授から出版社に要求してみる。出版社が同意しない場合は、１著者につき２冊、日本中国学会に２冊、『論文集』を贈呈する。それ以上必要な著者には購入していただく（著者割引がある予定）。

6．元論文の内容修正は行わない。ただし、簡単なミスプリ訂正などは構わない。また、著者が希望する場合は、論文の末尾に、著者による「後記」を書き入れることができる。その長さは１篇につき日本語で400字を越えないものとする。

7．中国側が翻訳論文を他に転載する場合には、著者に告知するものとする。

8．受賞論文の中で、すでに中国語に翻訳されているものがあれば、全訳・部分訳を問わず、中国側に知らせてもらいたい。かつ、その翻訳版の論文を中国側に送ってもらいたい。

その後、池田は、11月14日、受賞者（哲学部門）会員のみなさんに、「受賞論文に関する報告とお願い――既翻訳版についての調査」なる書簡を送って、上記８点の諸項をご報告した。

終わりに

『日本中国学会賞受賞論文集』（仮称）の中国語訳と中国出版のあらましは、以上のとおりである。これが首尾よく運ぶか否かはまだ未知数であるが、どちらに転んでも日本の中国研究者には緊張や刺激をもたらすことだと思う。私としては、それが日本の研究と中国・世界の研究の、双方にプラス方向に働いてくれることを心から願っている。

かつて、本学会の歴史上、代表的な研究書を日本学術会議（文学哲学史学学会連合）に推薦して、英文の「研究論文集、研究論文抄録誌」に掲載したことがある。その年度と著者・書名は以下のとおり（本学会『日本中国学会五十年史』、1998年10月発行、による）。

昭和26年度
　青木正児『清代文学評論史』
　宇野精一『中国古典学の展開』
昭和28年度
　福井康順『道教の基礎的研究』
　吉川幸次郎・入矢義高・田中謙二 共著『元曲選釈 第一集』
昭和31年度
　加藤常賢『支那古代の宗教と思想』
　白川　静『楚辞発攷』
昭和32年度
　重沢俊郎『中国古代に於ける合理的思惟の展開』
　前野直彬『明七子の先声――楊維楨の文学観――』
昭和33年度
　藤堂明保『中国語音韻論』
　松本雅明『詩経諸篇成立に関する研究』
昭和34年度
　今井宇三郎『宋代易学の研究』
　島　邦男『殷墟甲骨の研究』
昭和36年度
　白川　静『詩経の研究』
　星川清孝『楚辞の研究』

真に壮観である。残念ながらこれらの英文版を見ていないから、推測でものを言うしかないが、当時の英語文化圏の研究者がたとえ「抄録誌」であってもこれらに眼を通したとしたら、彼らは日本の中国研究に深い尊敬の念を抱いたにちがいない。そして、何よりも大事だと思われることは、半世紀前の日本の中国研究の隆盛が、本学会の目的意識的な世界発信を伴っていたということである。

（2008年11月26日）

古代文字資料館

愛知県立大学　吉池　孝一・竹越　　孝・中村　雅之(非常勤)

古代文字資料館は愛知県立大学のE511研究室にある。これは大学の組織ではない。数名の有志により2003年に設立されたもので、①古代文字資料の公開展示、②機関誌と図書の発行、③ウェブサイトでの情報発信を柱として運営している。この三つの柱につき、それぞれの語り口で紹介をさせていただく。

①古代文字資料の公開展示

漢字と中国周辺の文字を中心に、楔形文字からマヤ文字まで約200点の文字資料を公開展示する。ほぼ半年毎にテーマを設け、空き研究室にショーケースを並べて展示するのであるが、案内の看板もなく、ポスターを数枚貼りだしてあるだけなので県大の学生でもその存在を知るものは少ない。それでもポツリポツリと学生や地域の皆さんがやってくる。ときおり、他大学の研究者も調査にくる。印章・貨幣・粘土板・羊皮紙・拓本など比較的小型の資料を中心としたささやかな展示であるが、過日(平成20年7月28日)、朝日新聞の全国版朝刊の「お宝発見」というコーナーで当館が紹介されるという珍事があった。

これまでに開催した資料展を紹介すると次の通り。「メソポタミア・エジプト・ギリシアの文字」「アルファベットの世界」「古代シルクロードの文字」「中国の民族古文字」「モンゴル時代の民族古文字」「五つの古代文明の文字」。2008年10月現在、「シルクロードの文字—ソグド文字とその末裔—」という展示を行なっている。これらのタイトルからも想像できるように、多種多様な古代文字の資料が一堂に会しているところに本資料館の特徴がある。その中でも、古代シルクロードの貨幣や印章などの文字資料（カローシュティー文字・ソグド系文字・西夏文字・パスパ文字など）が比較的豊富である。とくに、パスパ文字の資料（大小の印章・銅製のおもり・碑文の拓本・貨幣など）は日本屈指（？）のコレクションとなっている。

最後に一言。実物は、複製から得られない思いがけない事実を示してくれることは言うまでもないが、何よりも学問への情熱を呼び起こしてくれる。その意味で、実物資料の公開展示は、学問を志す学生のためであり私自身のためでもある。これらの資料は当館の基盤であるが、次に紹介する②と③にこそ古代文字資料館の面目がある。

（以上 吉池）

②機関誌と図書の発行

古代文字資料館では2002年の11月より『KOTONOHA』という研究誌を月刊のペースで発行しており、2008年10月現在で70号を数えるに至っている。毎号の表紙には「‘言語に関わる考察の切れ端’を集めた雑文集」という一文が掲げられ、その下に印章や貨幣といった文字資料が写真で紹介される慣例である。内容は毎号3篇程度の研究ノートやエッセーなどで、両面印刷したB5紙をホッチキスで綴じただけの小冊子とはいえ、日本における言語学関係の月刊誌は現在のところ大修館書店の『言語』と本誌だけであろうと自負している。第1号から第11号までは愛知県立大学E511研究室の発行という形であったが、2003年11月の古代文字資料館設立に伴い、第12号からはその機関誌という位置づけになった。

創刊当時は吉池氏とともに愛知県立大学外国語学部中国学科の学部生が執筆の主体であったが、現在ほぼ毎号執筆しているのは中村・吉池・竹越の3名であり、まれに学生や卒業生の論考が加わるという陣容である。3名の主な執筆領域は次の通り。中村氏は世界の文字・音韻全般を扱い、短いながらも該博な知識と卓越した推理力に裏打ちされたエッセーを数多く執筆している。吉池氏は中国と中国周辺の

古代文字に関する論考を多く発表し、特にそのパスパ文字に関する研究は高い評価を得ている。竹越は朝鮮資料と満洲語資料を主な対象として、校訂・翻訳・索引といった資料を多く掲載している。なお、これまでに遠藤光暁（青山学院大学）、竹越美奈子（愛知東邦大学）、呉英琼（内蒙古大学）といった学外の諸氏からも論考が寄せられたことがある。

『KOTONOHA』に発表された文章は、原則として翌月にPDF形式でホームページ上に公開されることになっており、ネット環境さえあれば誰でもダウンロードして読むことが可能である。この点、本誌は極めて開かれた存在であり、掲載された論考や資料が海外の文献に引用されたことも一再ではない。

また、これに付随した活動として、モノグラフ・シリーズである『KOTONOHA単刊』の発行がある。2005年以来、ホームページ上で竹越による満洲語文法書の翻訳、及び中村氏による『音韻学入門』をPDF形式で公開してきたが、紙媒体の図書として出版しようという機運の高まりに応じ、これまでNo. 1として竹越孝編訳『清代満洲語文法書三種』(96頁,2007年8月)、No. 2として中村雅之著『中古音のはなし—概説と論考』(104頁,2007年10月)を刊行した。間もなくNo. 3として、『KOTONOHA』の母体ともいえる同人誌『語学漫歩』のアンソロジー、『語学漫歩選』が刊行される予定である。

（以上 竹越）

③ウェブサイトでの情報発信

古代文字資料館が物理的な形で（つまり固定の場所を確保して）設立されたのは2003年11月のことであるが、翌2004年7月からウェブサイトを開設して、インターネット上での情報発信を始めた。最初は当館の管理する資料をデジタル画像で紹介するのみであったが、やがてウェブサイトの特性を生かしたいろいろな情報発信をおこなうようになった。サイトの内容は次のとおり。(1)文字資料の画像提供と解説、(2)機関誌『KOTONOHA』のPDFファイルによる公開、(3)「文字を知る」、(4)その他、である。(1)は本ウェブサイトの中核であり、当館の管理する種々の文字資料を解説付きで公開している。例えばトップページの文字索引から「パスパ文字」をクリックすると、約30点の見本小画像が現れる。次にそれぞれの画像をクリックすると、より大きく鮮明な画像と解説を見ることができる。(2)は上に述べたように、毎月前号の『KOTONOHA』をアップしており、自由に読むことができる。(3)は個々の文字の解説をあらゆる角度からおこなうことを目指しており、将来的にはこのコーナーがデジタル版古代文字資料館の柱になるはずである。高校生や大学生が読んで分かるように説明することを心がけている。現在「パスパ文字を知る」と「満洲文字を知る」が公開されており、間もなく「漢字関連文字を知る」がアップされる予定。以上のほかに「『語学漫歩』総目録」「いろいろな概説」「古書」「いろいろな話」などのコーナーがある。

最後に、古代文字資料館の沿革と展望について簡単に述べておきたい。1994年から2003年まで「対音対訳資料研究会」という小さな集まりが開かれていた。参加者は毎回5名程度であったが、全19回にわたって開催され、アジアの文字資料を対象とした研究発表と熱心な討論がおこなわれた。その研究会の初期には東京・富山・鹿児島に分散していた主要メンバー三人が2004年にはなぜか皆、愛知の地にあった。そこで、2002年以降吉池氏の構想に始まった雑誌『KOTONOHA』の発行と古代文字資料館の運営に、竹越・中村の二人も同乗することになったのである。幸い、『KOTONOHA』は多くの読者に好意的に迎えられ、サイトの各種コンテンツも反響が大きい。今後は更なるコンテンツの充実によって若い学生や研究者の興味を掘り起こしつつ、文字研究・言語接触研究の情報拠点として機能することを目指したい。インターネットを利用できる方は、ぜひ一度当館のウェブサイトを訪れてみて下さい。各種検索ソフトで「古代文字資料館」を検索すればすぐに見つかります。

（以上 中村）

関西大学グローバルCOE「文化交渉学教育研究拠点」(ICIS)

関西大学　吾妻　重二

関西大学における「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」プロジェクトが平成19年度（2007年）、人文科学分野のグローバルCOEに採択された。周知のように、グローバルCOEは、文部科学省が、「我が国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援」することを目的に公募した大型プロジェクトである。採択後、関西大学ではただちに「文化交渉学教育研究拠点」(Institute for Cultural Interaction Studies，略称ICIS，アイシス）を設立して活動を開始した。当拠点は中国を含む東アジアの歴史的領域において採択された全国唯一のグローバルCOEであり、ここにそのあらましを紹介したい。

概要

関西大学はこれまで東西学術研究所、学術フロンティアとしてのアジア文化交流研究センター、大学院の中国文学専修・史学専修などを通して中国学、日中交流史、アジア史研究の伝統を持つが、これらの実績を踏まえつつ、新しい学問分野としての「文化交渉学」を構想するとともに、その手法を身につけた若手研究者の育成を目指している。

ICISの活動目的は、以下の3点に集約される。

1．東アジア世界を多対多関係の織りなす文化的複合体として捉える複眼的視座を共有し、国際的発進力を持つ自立した若手研究者を育成する。

2．従来の二国間関係あるいは学問分野別の文化交流研究を越えて、新たな学問分野としての「文化交渉学」を創出し、その理論と方法、具体的研究事例をする。

3．各国で個別に行われている文化交流研究・対外関係史研究などを国際的ネットワークで結びつけ、東アジア各地域の文化研究をリードし、固有の「国際学会」を有する研究ハブを構築する。

これには若干説明が必要であろう。とりわけ重要なのは「東アジア世界を多対多関係の織りなす文化的複合体として捉える」という視点である。すなわち、文化は孤立して固定的に存在しているのではなく、他の文化とのたえざる接触を通じて影響しあい変容しながら再生産され、展開していく。これは純粋な「中国文化」なるものも、純粋な「日本文化」なるものも実体としては存在せず、実はさまざまな他文化との接触、交渉のもとに形づくられるという見方であり、文化を「複合体」として見る捉え方でもある。言い換えれば、中国学や日本学、韓国・朝鮮学、歴史、思想、文学、語学といった「従来の二国間関係あるいは学問分野別」の枠組を超えようとする構想であり、上記において、新たな学問分野としての「文化交渉学」というのもそのような意味である。

したがってこの場合、たとえば儒教の研究は先秦時代のみでは完結せず、東アジア地域への伝播や変容、あるいは他地域の儒教との比較という視点のもとに捉えなければならないことになる。そのことによって儒教の持つ外延と内包、すなわち儒教とは何かが、いっそう明確化されるであろう。そして、そのことによってまた、相互の共通点と相違点、すなわち各地域・国家の文化の特色をより正しく測定することが可能になるはずである。これは他の文化事象についても同様である。

組織

組織としては、本学専任教員15名を事業推進担当者として配置している。このほか、助教1名、特別研究員2名、COE-DAC 1名、PD 3名、博士課程後期課程の院生8名をRAとして任用している。RAを除くメンバー構成は以下のとおりである（写真参照）。

- 拠点リーダー
  - 陶　徳民　日本漢学史・東アジア国際関係史
- 拠点サブリーダー
  - 内田　慶市　中国語学・近代東西言語接触研究
  - 藤田　高夫　中国古代史・西北辺境史・近代学術史
- 事業推進担当者
  - 吾妻　重二　中国思想史・儒教儀礼・東アジア思想研究
  - 藪田　貫　日本近世史・女性史
  - 原田　正俊　日本中世史・仏教史
  - 増田　周子　日本近現代文学・比較文学
  - 二階堂善弘　中国宗教史・道教・東アジアの民間信仰
  - 松浦　章　近世東アジア海域交渉史・アジア海上交通史
  - 野間　晴雄　人文地理学・アジア稲作社会論
  - 熊野　建　文化人類学・東南アジア地域研究
  - 高橋　誠一　歴史地理学・東アジア世界と日本
  - 伏見　英俊　チベット文化研究
  - 小田　淑子　宗教学・イスラーム思想
  - 沈　国威　中国語学・近代漢語語彙交流史
- 助教
  - 西村　昌也　東南アジア考古学・ベトナム地域研究
- 特別研究員
  - 佐藤　実　中国思想史・近世中国のイスラーム思想
  - 篠原　啓方　朝鮮史・新羅文化研究
- DAC（デジタル・アーカイブズ・キュレーター）
  - 氷野　善寛　言語コーパスおよび文献データベース
- PD
  - 木村　自　文化人類学・東アジアのイスラーム文化
  - 岡本　弘道　中国史学・海域アジア交流史
  - 于　臣　日本学・日本経済思想史
  - 孫　青　中国近現代学術史

このようにICISのメンバーは、地域としては中国、西アジア、日本、韓国・朝鮮、ベトナム、東南アジア、学問領域としては歴史、思想、宗教、文学、言語、外交史、文化人類学、地理学、考古学など東アジアの人文学領域をカバーしている。ほかに客員教授制度があり、これまで京都大学人文科学研究所の高田時雄教授、浙江工商大学の王勇教授、ヨーク大学のジョシュア・フォーゲル教授、シンガポールの南洋理工大学の王貞平准教授、東京大学の平野健一郎名誉教授を招聘し、文化交渉にかかわるテーマで講演および授業を担当していただいた。

大学院新専攻と若手研究者の育成

さて、グローバルCOEに求められるのは研究面のほか、教育面すなわち若手研究者の人材育成である。そのため2008年度、本学大学院文学研究科に「文化交渉学専攻・東アジア文化交渉学専修」を開設した。2008年度時点で前期課程13名、後期課程5名であり、日本、中国、韓国、台湾、ベトナム籍の学生が在籍している。

文化交渉学専攻における教育の特徴としては3つ挙げることができる。すなわち、語学力の習得、フィールドワークの実施、若手研究者による国際学術フォーラムの開催である。

まず、語学としては英語に加えて2種類のアジア言語（中国語、韓国語、日本語）をアカデミック情報発信のための言語とし、その学習を必須としている。

次に、フィールドワークを博士課程後期課程の必須科目「周縁プロジェクト」として毎年行うこととしている。2008年度は8月末から9月末にかけてベトナム・フエ郊外のタインハー地区においてこれを実施し、筆者も参加した。

若手研究者による次世代学術フォーラムも毎年開

催の予定で、助教、特別研究員、COE-DAC、PD、博士課程後期課程院生たちを中心に、海外の同世代研究者を招いて実施する。これは若手研究者の中に国際的ネットワークを形成するとともに、リーダーシップを発揮できる能力を養うためである。2008年度は12月13日・14日に「境界面における文化の再生産──東アジアにおけるテクスト、外交、他者イメージ、茶文化の視点から」を開催した。

このような若手研究者育成は、先にも述べたように、従来の人文学の学問分野を超える学際的性格をもつ。しかしこれは対象を限りなく拡散し、焦点をぼかしてつまみ食いしたり、単なる寄せ集めに終始したりすることではない。ここが大切なところであって、各自のコアとなる研究領域をまず確立し、そのうえで当の研究領域を相対化する視点と方法を身につけることが求められるのである。いわば専門的アプローチに加えて複眼的アプローチを期待するわけで、もちろんこのことは院生のみならず、事業推進担当者である我々教員についてもいえる。

なお、院生に対しては充実した奨学金制度を設けており、志ある学生には当専攻入学を薦めていただければ幸いである。

渋沢記念講座

渋沢栄一記念財団の協力により、文化交渉学専攻・東アジア文化交渉学専修の大学院生を対象とした公開講座を開催している。これは秋学期における15回の連続講義であり、2008年度は「東アジアの過去、現在と未来」というテーマのもとに、入江昭・ハーバード大学名誉教授、渋沢雅英・渋沢記念財団理事長、京都大学・山室真一教授、五百旗頭真・防衛大学校校長教授、朱建栄・東洋学園大学教授、コルカット・プリンストン大学教授、河田悌一・本学学長のほか、陶徳民、二階堂善弘お二人のICISメンバーらにご担当いただいた。2009年度は思想と宗教、2010年度は漢文や芸術や音楽などの学芸をテーマに開催する予定である。

海外連絡事務所・窓口の開設と学術交流協定

ICISでは海外との学術交流を推進するために研究諸機関と協定を結んでいる。とりわけ文化交渉学に関するプログラムを協力して推進し、双方が協力して事業を行うために、北京、上海、台北、ソウルの4ヵ所にICISの連絡事務所・窓口を開設した。北京外国語大学（海外漢学研究中心）、復旦大学（文史研究院・歴史学系・歴史地理研究所）、国立台湾大学（文学院）、韓国の高麗大学校（日本研究センター）がそれである。このほか、中国の中国浙江工商大学（日本文化研究所）、韓国の高麗大学校（中国学研究所）および国立慶尚大学校（慶南文化研究院）、国立全北大学校・人文韓国（Humanities Korea）「米と生活・文明研究団」、安東市の国学振興院とも学術協定を結び、国際学術交流を積極的に展開している。

研究活動と成果

これまでに行ってきた主な研究活動および成果には次のものがある。

1．国際シンポジウム

これまで2回開催した。第1回国際シンポジウムは「文化交渉学の可能性を考える──新しい東アジア文化像を目指して」と題して2007年10月4日・5日に開催した。ICISの開設を記念して行ったもので、プリンストン大学の余英時名誉教授をはじめ、中国、台湾、シンガポール、ヨーロッパ、日本など国内外の学界をリードする研究者に発表していただいた。

続く第2回国際シンポジウムは2008年10月24日・25日、「文化交渉学の構築Ⅰ──‘西学東漸’と東アジアにおける近代学術の形成」と題して開催した。

2．研究集会

研究集会はこれまで3回開催している。第1回は「東アジアにおける書院研究」と題して2008年1月29日に、第2回は「内藤湖南への新しいアプローチ」として2008年6月28日に開催し、さらに第3回は「周縁から見た中国文化」として2009年1月24日に開催した。

3．創生部会

創生部会は従来のディシプリンを超える視点

と方法論を構築するための、ICISスタッフ全員による発表である。これまで14回開催し、各自の研究領域における実績と方法、展望などを説明するとともに、それを「文化交渉学」のテーマに昇華させるための問題提起と検討をたえず行っている。

4．紀要

ICISの研究紀要としては『東アジア文化交渉研究』を毎年1回刊行している。ほかに、国際シンポジウムや研究集会の開催に際して、そのつど報告論文集を紀要「別冊」として刊行しており、これまで「文化交渉学の可能性を考える——新しい東アジア文化像をめざして」、「東アジアにおける書院研究」、「内藤湖南への新しいアプローチ——文化交渉学の視点から」の3冊を刊行している。

5．ニューズレター

ICISの研究活動を内外に広く周知するために、ニューズレターを毎年2回刊行している。東アジアへの発信と相互協力が不可欠なため、スタッフの協力を得て日本語版、中国語版、韓国語版、英語版の4ヵ国版を作成している。

6．データベース

これまで、内田慶市教授、沈国威教授、氷野善寛研究員を中心に、「近代漢語文献データベース」、「現代中国語コーパス」、「漢字文化圏近代漢語研究データベース」を作成し、Webで公開している。

国際学会の設立

このほか、各国で個別に行われている関連研究を国際的ネットワークで結びつけるために学会「東アジア文化交渉学会」（仮称）を設立する予定である。現在、2009年6月の発足を目指して準備中であり、中国、台湾、韓国、アメリカ、ヨーロッパなどの大学・研究機関および研究者たちを結んで構成する。機関誌の掲載論文はすべて英語によるものとし、そのための翻訳者もすでに手配済である。これは東アジア各地域の文化研究をリードするハブを作り、国際的発信力をより強化するためのものである。

以上、グローバルCOE拠点であるICISについてざっと紹介した。この新たなプロジェクトは、一言でいえば「挑戦」である。これまでの手慣れた研究手法、研究領域から一歩踏み出さなければならず、国際シンポジウム、研究集会、創生部会をはじめとする研究会の開催は目白押しであり、論文その他の成果も迅速かつ着実に挙げていかなければならない。教員、若手研究者、院生いずれも多忙きわまりないが、上述した「文化交渉学」の構想は今後の中国学や東アジア学の発展のために避けて通ることのできない路と考えている。大方のご支援とご協力をお願いするとともに、日本中国学会の未来に何がしかの示唆となれば幸いである。

なおICISについて、より詳しくはホームページ（http://www.icis.kansai-u.ac.jp/index.html）をご覧いただきたい。

「文化交渉学教育研究拠点」（ICIS）メンバー

減少する人文学の大学教員数

広島大学　富永　一登

最近の雇用状況からして、大学教員の減少だけを問題にしても、解決策は見いだせないのだが、長期的な研究基盤の安定が必要な人文学関係のポスト減は、教育研究活動に深刻な影響を与えかねない。文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室でも、人文学の振興について委員会を設置して検討中である。今、そのデータ（学校教員統計調査報告書）を掲載して、人文学分野の大学教員数の実態を会員にお知らせしておきたい。なお、人文学分野というのは、哲学・文学・言語学・史学・人文地理学・文化人類学であり、社会学・心理学は、社会科学に含まれる。

大学院重点化・部局化によって、人文学分野の博士課程後期の学生数は、平成16年には7,600人（国立3,678、公立405、私立3,517）で、10年間で倍増した。しかし、その主な就職先である大学教員の数は、以下のとおり減少している。

本務教員

		平成10年	平成16年	増　減
国立	25歳未満	8	1	－7
	25歳以上30歳未満	143	60	－83
	30歳以上35歳未満	574	371	－203
	35歳以上40歳未満	939	685	－254
	40歳以上45歳未満	1,067	935	－132
	45歳以上50歳未満	1,031	1,028	－3
	50歳以上55歳未満	1,035	931	－104
	55歳以上60歳未満	783	1,045	262
	60歳以上65歳未満	575	564	－11
	65歳以上	38	28	－10
	計	6,193	5,648	－545

		平成10年	平成16年	増　減
公立	25歳未満	—	—	—
	25歳以上30歳未満	10	3	－7
	30歳以上35歳未満	95	63	－32
	35歳以上40歳未満	190	142	－48
	40歳以上45歳未満	217	206	－11
	45歳以上50歳未満	230	242	12
	50歳以上55歳未満	211	245	34
	55歳以上60歳未満	152	250	98
	60歳以上65歳未満	141	157	16
	65歳以上	29	27	－2
	計	1,275	1,335	60

		平成10年	平成16年	増　減
私立	25歳未満	19	18	－1
	25歳以上30歳未満	202	177	－25
	30歳以上35歳未満	814	794	－20
	35歳以上40歳未満	1,471	1,396	－75
	40歳以上45歳未満	1,873	2,028	155
	45歳以上50歳未満	2,302	2,346	44
	50歳以上55歳未満	2,344	2,553	209
	55歳以上60歳未満	1,787	2,780	993
	60歳以上65歳未満	1,938	2,143	205
	65歳以上	2,746	2,182	－564
	計	15,496	16,417	921

兼務教員

		平成10年	平成16年	増　減
国立	25歳未満	9	10	1
	25歳以上30歳未満	180	122	−58
	30歳以上35歳未満	774	627	−147
	35歳以上40歳未満	1,116	969	−147
	40歳以上45歳未満	1,414	1,209	−205
	45歳以上50歳未満	1,281	1,297	16
	50歳以上55歳未満	1,096	1,110	14
	55歳以上60歳未満	769	926	157
	60歳以上65歳未満	514	515	1
	65歳以上	434	393	−41
	計	7,587	7,178	−409

		平成10年	平成16年	増　減
公立	25歳未満	1	—	−1
	25歳以上30歳未満	37	48	11
	30歳以上35歳未満	228	189	−39
	35歳以上40歳未満	324	228	−96
	40歳以上45歳未満	359	330	−29
	45歳以上50歳未満	321	375	54
	50歳以上55歳未満	293	280	−13
	55歳以上60歳未満	175	257	82
	60歳以上65歳未満	153	177	24
	65歳以上	160	139	−21
	計	2,051	2,023	−28

		平成10年	平成16年	増　減
私立	25歳未満	15	20	5
	25歳以上30歳未満	880	856	−24
	30歳以上35歳未満	3,594	4,071	477
	35歳以上40歳未満	5,483	5,644	161
	40歳以上45歳未満	6,117	6,612	495
	45歳以上50歳未満	6,032	6,658	626
	50歳以上55歳未満	5,246	6,146	900
	55歳以上60歳未満	3,186	5,337	2,151
	60歳以上65歳未満	2,967	3,313	346
	65歳以上	4,088	3,977	−111
	計	37,608	42,634	5,026

国立大学法人化が始まった平成16年までのデータであるが、いずれも若年から中年の人数が減少していることがよくわかる。現在のデータはないが、増加している世代が退職した後の補充が順調とは言えないので、減少傾向は更に進んでいるであろう。博士課程で研鑽を積んでいる若手研究者にとっては、前途多難な数値である。当面は、わずかに増加傾向にある私学の兼務教員すなわち非常勤講師に望みを託すしかない。この状況が続くと、伝統的研究方法の継承が重要な学問の基礎となる人文学研究の将来は危うくなってくる。

一方、社会学・心理学などを含む社会科学分野の教員数は、同じ平成10年から16年の間に、本務教員が国立434人、公立120人、私立3,263人、兼務教員が国立473人、公立154人、私立6,485人とすべて増加、若年と中年もわずかな減少にとどまり、むしろ増加している年齢層もある。人文学分野とは違い、社会的要請が強い分野は、当然ながら教員数も増加しているのである。

各大学の分野別の教員ポストの配分については、文部科学省は各大学に任せるという方針である。限られた大学教員数の中で、人文学分野の教員数の減少を防ぐには、現職教員が何らかの形で大学内において活躍し、人文学の必要性をアピールするしかないであろう。

各種委員会報告

[大会委員会]

竹村　則行

日本中国学会第60回大会は2008年10月10・11日の両日、京都大学で開催された。池田代表以下、京大関係者のご苦労に改めて感謝申し上げる。大会は31名（うち半数は院生他）の研究発表に加え、柳瀬廣、中西進両氏の講演が彩りを添えた。大会参加者は487名、懇親会出席者は160名であった。会期中は企画展「京大中国学の裾野」も併せ開かれた。更に創立60年を記念して10日には顧問の先生方との懇談会も持った。講演会や懇談会でいただいた貴重な提言を、今後学会は真剣に検討しなければならない。

今大会が盛会であったことは、輝かしい伝統を持つ京都大や京都観光の魅力、周辺の研究者人口の多さや交通の至便等の諸要素が考えられる。ただ今後の学会の発展の為には、准教授・教授層の発表増が望まれる。この層が本務校の業務で大変なことは承知するが、やはり学会の内容充実はこの層の本務（研究）上の活躍に係るであろう。

大会開催校は、開催地域や法人（国公私立）等のバランスを考え、数年先を見越して候補校と相談して決定される。幸い63回までは決定済み（62回広島大、63回九州大）であり、2009年は64回開催校の検討に入る。開催校も、従来のDC大学院設置校に加え、相当数の会員を擁する大学も候補校に挙げ、大会委員会の積極的な関わりと共に開催を相談することとした。会員数が数百名であった頃と違い、今日は会員数の増加と共に雑務が激増し、関係者の苦労は大変であるが、これまで同様、開催校受諾に積極的な協力をお願いしたい。

次回61回大会は2009年10月10・11日、関東地区の文教大学（越谷キャンパス）で開催される。研究発表を含め、多数の会員の参加を乞う。

[論文審査委員会]

土田　健次郎

本委員会の最大の責務である『日本中国学会報』第60集掲載論文の編集に関しては、今回は比較的順調であったと言える。トラブルは皆無ではなかったものの、刊行時期に影響するようなものではなかった。

なお、前号の『学会便り』でも報告したように今回は投稿論文に甚だしい枚数超過のものが多く、この傾向がここ数年にわたって顕著であることから、あくまでも字数ではなく枚数の厳守であることがより明確になるように「執筆要領」を一部修正した。この修正版は5月17日の理事会で承認され、既に第60集およびホームページに掲載されている。

次の第61集に関しては、依頼論文執筆者について下記の各会員を候補者として理事会に提出し、5月17日の理事会で承認を得た。

哲学・思想部門（評　議　員）林　　克　会員
　　（一般会員）廖　　肇亨　会員
文学・語学部門（評　議　員）佐藤　　進　会員
　　（一般会員）狩野　　充徳　会員

今年度の学会賞については、哲学・思想部門で候補者を出せなかったのが残念だが、応募論文の数が減り気味であることが影響していると思われる。その背後に若手研究者自体が減少しているという状況があることを深刻に受け止める必要があろう。

日本学術振興会奨励賞推薦者については、前年度と同じく評議員の意見を徴しながら審議したが、その結果、今年度は該当者無しとの結論に至り、5月17日の理事会で承認された。なお、前年度推薦の宮紀子会員の『モンゴル時代の出版文化』をはじめとする一連の業績は、今年度も選考の対象

となる。

今後の本委員会日程は次の通りである。

第２回委員会　2009年２月１日（日）

（在京委員及び副委員長のみ）

査読者・閲読委員の選定。

第３回委員会　2009年３月29日（日）

第61集掲載論文・学会賞候補者の選定。

ところで10月11日の委員会では、前回に引き続き、不採用論文に対してその理由や評価を投稿者に通知するかどうかの議論がなされたが、今回も結論には至らなかった。情報開示ということからも不採用者に対して理由をきちんと通知すべきではないか、大学院生の場合はどこに問題があったかを通知することで教育的効果があるのではないか、という開示に積極的意見がある一方で、論文採否は査読者の意見をもとに委員会で議論して決定するのであるから査読コメントを並べるだけではなく委員会でなされた議論もまとめることになりそれは委員にとって過重負担ではないか、査読者の意見の不一致をどう伝えるかも容易ではない、大学院生には指導教員がきちんと指導すべきものであってそれを委員会に期待するのは筋違いではないか、査読者の意見をもとに委員会で議論してそれら全体の行程の結果として採否がなされているのであって手続きはきちんとふんでいるのであるから結果だけの通知でよいはずである、といった慎重論も出た。

そのほか、通知する場合は、不採用者全員にするのか、それとも通知を希望した者のみにするのか。評価項目を細分化して評点（A、B、Cなど）のみを通知するという考えもあるが、そのようなことが果たしてどの程度意味があるのか、といった議論もなされた。

この問題は、他学会の例も参考にして今後継続して議論していくことになった。

［研究推進・国際交流委員会］

委員長　藤井　省三

今期の研究推進国際交流委員会は、以下の委員・幹事により構成されています。なお（　）内に新任・留任・専攻・所属などを記しました。

金　文京　副委員長（委員留任、文学、京都大学）
吾妻重二　委員（留任、哲学、関西大学）
古屋昭弘　委員（留任、語学、早稲田大学）
松村茂樹　委員（留任、文学・芸術、大妻女子大学）
王　俊文　幹事（留任、文学・芸術、東京大学大学院生）

本委員会はこれまでＥメール会議を数回、大会時の本会議を一回開きまして、主に二つの課題に取り組んできました。

課題（一）若手会員研究発表活性化のための小部会制および分科会方式の試行

（１）若手研究者会員の増加と大会研究発表の改革

日本中国学会会員数は本年度は上昇に転じたとはいえ、長期的には微減の趨勢にある。斯学の振興のためには、研究意欲に富む優れた若手研究者の学会入会およびその後の学会活動活性化を促進する必要があろう。そのための一つの方法として、大会を若手研究者にとってより魅力的なものへと改革することが考えられ、その改革の一案として大会研究発表制度の改革を提案申しあげたい。

（２）現行大部会制の長所と短所

現行の研究発表は第一部会（哲学・思想）、第二部会（文学・語学）、および大会によっては第三部会（近現代文学）という大部会制で行われている。この大部会制は二日間で各分野の日本における研究の動向を理解できるという長所を有しており、実際に各部会は毎年100人から300人近くの

会員の参加を得て盛況である。

しかしながら若手研究者育成という視点から考えたばあい、現行の大部会制は必ずしも最上の条件を備えてはおらず、二つの問題点を指摘できよう。

一、若手研究者にとって二、三百人もの多数の会員を前に行う発表は、精神的負担が大きい。

二、若手研究者が周到な発表準備を行い、時に多額の旅費を自己負担して発表している割には討論の時間が短く、時に極端な批判的意見を浴びるに終始してしまうばあいも散見される。

以上二点の問題点を改善するために、本委員会は以下のような大会発表制度改革案を提起したい。

(3)小部会制の復活とその問題点

現行の二大部会制（または三大部会制）に替わる制度として、小部会制が考えられよう。数個の小部会を並行して開催することにより、同じ二日間の日程で二、三倍の時空を創出することが可能であり、これによって各発表により多くの時間を配分できるため、コメンテーター起用も可能となり、質量的により豊かな討論が可能となるであろう。

小部会制はかつて2000年大会（東京大学）において「先秦～魏晋セクション」から「清末・当代セクション」までの時代別セクションおよび「総合セクション」と合わせて６セクションで40件の発表を行ったことがあり、その際には報告20分、コメント10分、討論20分、合計50分を配分して十分な討論を行い好評であった。

このような時代別小部会制は2001年大会（福岡大学）にも引き継がれ、第一部会（六朝以前）以下、唐宋・元明清・近現代の四部会が実施され、40件の発表を行っている。このような時代別による小部会制を復活するのはいかがであろうか。

そのいっぽうで、小部会制導入には以下のような困難が予想される。

一、より多くの教室と係員の確保が必要とされる。ただし40人程度の分科会であれば、マイク等の設備は不要である。

二、投入時間が現行の30分から50分へと増大するに伴い、それに見合った発表討論の質的充実が求められるため、可能なかぎりより良質な発表を揃える必要がある。そのためには発表希望者に対しより長文の（例えば1600字程度）発表計画書提出を求めるなど、より厳格な審査体制を敷く必要がある。

三、司会者およびコメンテーターを委嘱する会員数が数倍増する。

このような予想される困難に伴い大会開催校の負担増も憂慮され、これをできる最小限に抑えるためには、理事会による援助体制の整備も必要であろう。

(4)第三部会における小部会制の試行と公募による分科会方式の導入

大会全体を大部会制から小部会制へと急激に改革することが困難であるならば、一つの大部会で実験的に試行することも考えられよう。たとえば第三部会（近現代文学）は従来から第一、二両部会と比べて発表者、参加者共に少なく、現行においてすでに実質的小部会となっている。また発表者も減少傾向にあるため、第三部会参加者のあいだからは公募による分科会方式の試行を求める声が上がっている。

分科会方式とは、発表・コメント・討論の２セットを一単位とするテーマ別分科会を公募するもので、日本台湾学会など隣接分野の学会ではすでに多年にわたる実績を積んでいる。その具体的な運営方法は以下の通りである。

分科会申請者は「五・四新文学の再検討」「1950年代香港映画研究」「ポスト戒厳令期の台湾フェ

ミニズム文学」などのテーマの元に、原則的に座長一名、発表者・コメンテーター各２名から構成される分科会を組織し、申請者を中心に約５名が協力しつつ分科会を準備し実行するというものである。

このような分科会方式は各種の研究会・中小規模の学会・研究者グループなど学会横断的な組織を基盤として計画されることが多く、そのいっぽうで老壮青各世代の会員の縦断的関係を深める効果も期待できよう。

ちなみに日本台湾学会では1999年の第１回大会以来、公募による分科会方式を主とし、自由研究発表（本学会現行の形式）を従として大会を運営しており、大きな成果を挙げている。

来年度の文教大学大会、あるいは再来年度の広島大学大会における第三部会で試行してはいかがであろうか。

（５）分科会方式における外国居住者・非会員の招聘に対する助成金

分科会方式が第一、二部会にも普及した暁には、各分科会申請者が座長・発表者・コメンテーターの一人として、外国居住の研究者を招聘する際、および国内の非会員を招聘する際に、１件に対し５万円から10万円ほどの旅費助成金を合計２、３件に支給することも検討に値しよう。これにより国際交流と他学会交流とを活性化できるのではあるまいか。

（６）現行の大部会制における老壮世代研究者への発表依頼およびその他

なお新たに小部会制・分科会方式の試行を検討するほかに、現行の大部会制においても、老壮世代研究者への発表依頼を増加するなどして、各世代の大会へのより積極的参加を促進することも必要であろう。

また発表者と会員とのより深く率直な研究交流を図るため、発表者の大会懇親会出席申し込みを義務づけてはいかがであろうか。

（７）なお本委員会内部には「小部会制、公募制については、分野ごとに事情も異なる。現代文学部会では強い要望があるとしても、その他の第一、二部会に対しても十分な意見聴取を行う必要がある」との意見もあった。

課題（二）中国学関係学科入学者増加のための大学受験生に対する広報活動

日中関係は経済を中心として親密化の度合いを増しているが、残念ながら日本の高等教育機関における中国学関係学科への入学者には、顕著な増加傾向は見られない。

その一方で、各大学では中国学関係学科の受験者数、合格者数、入進学者数等の減少を理由とする教員ポストや研究費の削減という憂慮すべき事態が発生している。

このような状況に対し、各大学、学部学科では入進学者増を図って高校への出張講義などを行っており、それなりの効果を上げているという。

日本中国学会も日本を代表する中国人文学分野の学会として、日本全国の大学受験生を対象とする中国学の魅力に関する広報活動を行ってはいかがであろうか。そこで具体的な活動として、大手予備校等と連携した次のような「日本中国学会おすすめの「大学で中国を学ぼう（仮題）」講演シリーズ」を提案したい。その具体的内容は以下の通りである。

１、大学受験生を対象として、中国の哲学・思想・文学・文化・言語の魅力を喚起することに熟達した啓蒙的中国学講演の講師を日本中国学会会員より地区別に選出し、講演題目・講師連絡先一覧を用意し、理事会名で同一覧を各地区大手予備校に提供する。

2、予備校は同一覧に基づき一名から数名の講師と直接交渉を行い、講師は要請に応じて出張講演を行う。

3、本シリーズ講演に際しては、理事会は各講演題目と関連する学習が可能な大学学部学科一覧、授業内容・シラバスなどの資料を作成して、HPに掲載する。

4、予備校では講演をDVD化して学生が随時閲覧できるような体制を取っているところが多く、講演後のDVDによる学生閲覧の便を考えて講演時間は30～50分程度を目安にすべきであろう。

5、初年度は理事会が評議員の中から各地区ごとの企画責任者を募集して当該地区の一覧（案）作成を依頼し、先に理事会の承認を得た数地区での実現を図る。次年度以後は全国七地区での実現を図る。

6、講師・題目一覧は最低一地区5項目、可能であれば10～20項目が望ましい。また本学会が中国学の総合学会であることに鑑みて、哲学・思想・文学・文化・言語の各分野を網羅することが望ましい。

7、原則的に予備校側には講師料・交通費の負担は求めない。それに代わって、パワーポイントなど視聴覚資料の準備費用を考慮し、日本中国学会が講師担当の会員に対し支度料（2万円程度か？）を支給する。初年度には仮に2地区で実施するとして各10講義合計20講義で40万円、次年度以後全国7地区すべてで実施したばあい、各5～10講義合計約50講義で100万円の新たな支出が必要とされる。

これに関して予想される問題点およびそれに対する対策は以下の通りである。

問題1：予備校における講演は大学入試の公平という理念に抵触すると判断される可能性がある。

対　策：講師候補者は講師受諾前に所属の大学・学部の教授会等に予備校講演を兼業として許可していただけるか否かを確認する。

問題2：本学会会員が多く居住し、予備校が多く所在している特定地区の大学に有利となり、その他の地区の大学には利点が乏しく、このような特定地区所在大学振興のための広報活動に対し、学会予算を執行することへの批判が生じる可能性がある。

対策1：初年度は数地区で実験的に実施し、好評であれば次年度以後、全国七地区に展開する計画であり、題目関係のテーマが学習可能な全国各大学等の学科HP、授業シラバス等を本学会HPで紹介するので、全国各大学における受験者・入学者増加対策に効果が期待される。

対策2：対策1では理解を得られぬ場合には、支度料支給を取りやめ、すべて講師の自己負担とする。ただし自己負担による奉仕的講演活動には長期的継続はあまり期待できないため、予備校側が自発的に講師に講演料・車代等を支給することは妨げない、として予備校に経済的負担を要望する必要もあろう。

問題3：企画責任者の引き受け手が現れぬ地区の会員が、反対する可能性がある。

対策1：持ち回り評議員会で採決を行い、圧倒的に可決されたばあいには、本案を粛々と実行する。僅差での可決、または否決のばあいには本案はお蔵入りとする。

対策2：学会有志として自主的組織を立ち上げ、本学会理事会の推薦を得て本案を粛々と実行する。

講師選出に関しては理事会・専門委員会等で慎重審議していただくとして、講演題目にはたとえば次のようなものが候補として考えられよう。

＊

日本中国学会おすすめの「大学で中国を学ぼう（仮題）」講演シリーズ講演題目一覧（案）

・『論語』の魅力
・老荘思想の世界
・中国の風水
・中国女性教育史
・漢方医学の思想
・中国気功の思想
・漢詩の魅力
・唐詩の魅力
・司馬遷『史記』の世界
・『三国志演義』の魅力
・『西遊記』の魅力
・『紅楼夢』の魅力
・中国幽霊の物語
・書道の楽しみ
・漢字の世界
・中国語の学び方
・中国料理の世界
・京劇の魅力
・中国映画の魅力
・香港映画の魅力
・台湾テレビドラマの魅力
・現代中国のポップカルチャー
・魯迅の世界
・北京都市物語
・上海都市物語
・その他

課題（一）（二）はすでに理事会に報告書として提出しまして、三月の理事会でご審議いただく予定です。会員のみなさまからもご意見を頂戴できれば幸いです。

研究推進国際交流委員会委員長　藤井省三

［出版委員会］

委員長　川合　康三

出版委員会は年２回の「学会便り」と年１回の『日本中国学会報』を刊行しています。『学会報』は編集担当校、「学界展望」の哲学・文学・語学三部門の執筆担当校、いずれも二年分をお願いしています。「学界展望」の執筆には大変な御負担をかけていますが、毎年充実した紹介、コメントをお寄せいただいています。『学会報』全体の編集も煩瑣な作業が多く、また期日通りに原稿、校正稿が集まらないなどの問題もあって、苦労の絶えない仕事ですが、論文審査委員会、モリモト印刷のご協力によって、今年は大会開催前に郵送できました。今後とも順調な刊行を続けていきたいと考えています。

［選挙管理委員会］

委員長　神塚　淑子

役員改選について

本年度は会則第11条にもとづき、評議員選挙、理事長選挙、監事選挙がそれぞれ以下の日程で行われました。それぞれの結果につきましては、別途公表しておりますのでここでは記載しません。

1．評議員選挙

平成20年６月７日(土)二松学舎大学において投票用紙発送業務、７月５日(土)同大学において開票。

2．理事長選挙

平成20年７月12日(土)名古屋大学において投票用紙発送業務、８月２日(土)斯文会館において開票。

3．監事選挙

平成20年10月10日(金)京都大学で行われた次期評議員会にて投票および開票。

評議員選挙にあたり会員各位に郵送しました文書の中に、会員動向の記載について重大なミスがあり、このことが判明した後、直ちに理事長と選挙管理委員長の連名で「お詫びと訂正」の文書を全会員に発送いたしました。この場をお借りして、改めて深くお詫び申し上げます。

選挙規約改正について

評議員選挙の投票率をどのようにすれば高めることができるかということは、長年の課題であり、数年来、選挙管理委員会において、いろいろ議論がなされてきました。これまでの議論をふまえ、７月５日(土)の選挙管理委員会で、10名連記の規定を10名以内（１名以上10名以内）の連記という方法に変更することで合意し、そのための選挙規約改正案を理事会と評議員会に提出することに決めました。

10月10日(金)開催の理事会・評議員会に提出しました改正案は次のとおりです。

①現行の選挙規約の評議員選挙の項に、「無記名で10名を連記して投票し」とあるのを、「無記名で10名以内を連記して投票し」に改正する。

②平成21年４月１日から施行する。

以上の改正案どおり、理事会・評議員会において承認され、10月11日(土)の総会においても、この旨、報告いたしました。

次回の評議員選挙が行われるのは、２年後の平成22年になります。これまでは10名連記していなければ無効になりましたが、改正により、今後は10名以内であれば何名記入しても良いことになり、投票しやすくなると思います。次回の評議員選挙の時に、10名以内の連記に変わったことを会員の皆様に周知するようにいたしますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

第60回大会の記念写真について

先般京都大学にて開催いたしました第60回大会の記念写真をご希望の方は、メールで学会事務局までお申し込みください。

（アドレス：ssj3@wwwsoc.nii.ac.jp）

ただしこのたびの写真は業者の撮影ではなく、学会事務局で撮影したものです。写っている方の一部に陰が入り込んでいるなど、決してできばえのよい写真とはなっておりません。この点ご了承ください。

代　　金：500円（送料込み）

支払い方法：写真をお送りする際に、振り込み用紙を同封いたしますので、それをご利用ください。

締め切り：１月31日

平成20年度　日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧

（単位：千円）

特別推進研究

●清朝宮廷演劇文化の研究　25,900
磯部　彰（東北大学）

特定領域研究

●東アジアにおける死と生の景観　6,400
薮　敏裕（岩手大学）

●日中通俗文芸の体系化を目的とした先駆的研究―小説・芸能を中心論題として　3,100
勝山　稔（東北大学）

●東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生―総括班　26,100
小島　毅（東京大学）

●歴史書編纂と王権理論に見る東アジア３国の比較　9,700
小島　毅（東京大学）

●朝鮮思想と中国・ヨーロッパ―東アジア海域交流のなかで　4,800
川原秀城（東京大学）

●宋元明における仏教道教交渉と日本宗教・思想　5,900
横手　裕（東京大学）

●寧波における知の営みとその伝統―学脈・宗族・トポフィリア―　4,500
早坂俊廣（信州大学）

●五山文学における宋代詩文の受容と展開―詩文集の注釈と詩話を中心に―　6,300
浅見洋二（大阪大学）

●儒学テキストを通しての近世的思考様式の形成―日中における対照的研究―　6,200
中村春作（広島大学）

●散楽の源流と中国の諸演劇・芸能・民間儀礼に見られるその影響に関する研究　5,400
加藤　徹（明治大学）

●日本における中国古典文学の伝播とその展開に関する研究　6,800
静永　健（九州大学）

●中国東南部の学術と図書の収集・出版・流通　4,300
高津　孝（鹿児島大学）

●中国思想文献の近世日本社会への伝来とその流通―新儒教と医学思想の文献を中心として　6,900
恩田裕正（東海大学）

●浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査　6,200
二階堂善弘（関西大学）

若手研究（Ｂ）　新規

●近世中国におけるムスリムの人生儀礼研究　1,000
佐藤　実（関西大学）

●東アジア仏教論理学史研究のための逸文データベースの構築　1,900
師　茂樹（花園大学）

●東西資料によるモンゴル時代の政治・文化交流の解析と実証　1,200
宮　紀子（京都大学）

●東アジア圏における中国古典小説の現代的意義と価値について　900
上原徳子（宮崎大学）

●中華民国期京劇の舞台装置に関する研究　1,000
田村容子（早稲田大学）

●中華人民共和国建国以降の映画作品と伝統演劇との関係性についての研究　800
阿部範之（同志社大学）

●郁達夫における大正文学受容の比較文学研究　700
大東和重（近畿大学）

●19世紀中国における翻訳語の研究　1,100
千葉謙悟（早稲田大学）

●甲骨文字における殷代の聖職者に関する総合的研究　800
陳　捷（立命館大学）

●「卜筮祭祷簡」による戦国楚の宗教文化の研究　1,300
森　和（早稲田大学）

若手研究（Ｂ）　継続

●『老子』の注釈史及び受容史を中心とした中国学術史及び思想史　1,000
齋藤智寛（京都大学）

●近代中国における「社会」認識―思想史分析を通じて　600
川尻文彦（帝塚山学院大学）

●宋代春秋学の基礎的研究　600
松崎哲之（常磐大学）

●東アジアの宗族におけるキリスト教思想の影響―儒教規範に基づく家族制を中心に―　500
安部　力（北九州工業高等専門学校）

●「満洲国」時期の文学に関する日中横断的研究　1,100
大久保明男（首都大学東京）

●1949年以前の中国映画界における外国映画の受容とその影響に関する研究　600
菅原慶乃（関西大学）

●日本中世禅林における柳宗元受容の基礎的研究　900
太田　亨（愛媛大学）

●一九四〇年代文学に見る「中国近代」の隘路　300
杉村安幾子（金沢大学）

●上中古漢語における機能語体系の通時変化のメカニズム―区域拡散の視点から―　700
松江　崇（北海道大学）

●広東語の談話モダリティの研究―意味機能と音声の相関に着目して　800
飯田真紀（北海道大学）

●明清期における礼学と「社会における礼教の普及」に関する研究　500
佐々木愛（島根大学）

基盤研究（Ｓ）　継続

●東アジアにおける儀礼と刑罰―礼的秩序と法的秩序の総合的研究　13,400
冨谷　至（京都大学人文科学研究所）

基盤研究（Ａ）　一般・新規

●『道蔵輯要』と明清時代の宗教文化　13,400
麦谷邦夫（京都大学人文科学研究所）

●出土資料群のデータベース化とそれを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析　13,100
関尾史郎（新潟大学）

基盤研究（Ａ）　一般・継続

●両漢儒教の新研究　8,400
渡辺義浩（大東文化大学）

基盤研究（Ａ）　海外学術調査・継続

●南北朝～隋代における石刻造像銘の調査及びその地域史的宗教環境の研究　5,700
佐藤智水（龍谷大学）

基盤研究（B）　一般・新規

●新出土資料を通してみた古代東アジア世界の諸相―漢字文化圏の中の地域性―　7,000
谷中信一（日本女子大学）

●日本国外に現存する日本漢籍の総合的研究　3,600
佐藤道生（慶應義塾大学）

●和刻本漢籍再評価のための綜合的研究―底本解明を目的として―　4,200
山崎　誠（国文学研究資料館）

●近代東アジアにおける漢文体とキリスト教―『天路歴程』を中心に　2,900
齋藤希史（東京大学）

基盤研究（B）　海外学術調査・新規

●激動する東アジアと琉球漢詩文～知識人の苦悩と思想～　3,300
上里賢一（琉球大学）

●湘南土話の総合的研究　2,900
吉川雅之（東京大学）

●漢文典籍の国際交流に関する実証的研究　4,700
石塚晴通（北海道大学）

基盤研究（B）　一般・継続

●中国近世白話文学の電子化状況情報及びコーパスの共有基盤の構築に関わる基礎的研究　1,300
笠井直美（名古屋大学）

●和漢古典学のオントロジモデルの応用　4,900
相田　満（国文学研究資料館）

●漢字文化圏の「近代」に関する総合的研究　800
刈間文俊（東京大学）

●台湾女性史とジェンダー主流化戦略に関する基礎的研究　3,000
成田静香（関西学院大学）

●戦国楚簡の総合的研究　3,400
湯浅邦弘（大阪大学）

●科挙に関する文献学的総合研究　2,300
佐藤錬太郎（北海道大学）

●東アジアにおける文明の衝突と「天」の観念の変容　5,100
井上厚史（島根県立大学）

●古代幼学書の発展的研究　4,100
黒田　彰（佛教大学）

●和漢聯句の研究　3,600
大谷雅夫（京都大学）

●日本近世期における中国白話小説受容についての基礎的研究　1,200
近衛典子（駒澤大学）

●戦時上海の文芸文化と邦字新聞「大陸新報」に関する多角的研究　4,400
大橋毅彦（関西学院大学）

●20世紀東アジア文学史における村上春樹の研究　2,800
藤井省三（東京大学）

●中国同時代文学の潮流を概括するための基礎的研究　1,700
千野拓政（早稲田大学）

●近代東アジアにおける異文化同化過程における翻訳の問題　4,900
井上　健（東京大学）

●南北朝楽府の多角的研究　2,800
佐藤大志（広島大学）

●東アジア圏の歌垣と歌掛けの基礎的研究　1,300
辰巳正明（国学院大学）

●文化大革命の文化史的再考　3,500
佐治俊彦（和光大学）

●東アジア（日本・中国・韓国）における歌謡の比較研究　4,400
真鍋昌弘（関西外国語大学）

●中国語の構文及び文法範疇形成の歴史的変容と汎時的普遍性―中国語歴史文法の再構築―　3,500
木村英樹（東京大学）

●中国語とその周辺言語におけるダイクシス　3,500
林　　徹（東京大学）

●東アジア角筆文献の発掘とその交流の調査研究―醍醐寺蔵宋版一切経の調査を主に―　3,200
小林芳規（広島大学）

●東アジアにおける戦争・植民地記憶の保存と表象に関する国際的総合研究　4,100
君塚仁彦（東京学芸大学）

●前近代東アジアにおける文書とその伝来に関する比較史的研究　3,500
坂上康俊（九州大学）

●『入唐求法巡礼行記』に関する文献校訂及び古代東アジア諸国間交流の総合的研究　2,700
鈴木靖民（国学院大学）

●宋代社会経済史語彙解釈のデータベース化　3,300
斯波義信（（財）東洋文庫）

●魯迅『解剖学ノート』の解読に基づく、20世紀初頭の留学生教育に関する事例研究　4,600
島途健一（東北大学）

基盤研究（B）　海外学術調査・継続

●北京・天津を中心とした華北の廟会と祭祀組織「香会」の実態研究　1,100
櫻井龍彦（名古屋大学）

●国際的視点から見た漢字文化圏における漢文訓読についての実証的研究　4,400
小助川貞次（富山大学）

●中国古医籍が日・韓・越の伝統医学形成史に与えた影響の書誌学的研究　1,200
真柳　誠（茨城大学）

●故宮博物院に収蔵される甲骨文の来源踏査―未刊本『甲骨刻辞』の解読を通して―　1,100
東　賢司（愛媛大学）

基盤研究（C）　新規

●『九章算術』の『算数書』との比較および数学史における位置付けの検討　600
田村　誠（大阪産業大学）

●古代より中世に至る日中古地理書の比較思想史的研究　2,300
薄井俊二（埼玉大学）

●大慧禅の思想史的研究　800
中西久味（新潟大学）

●道教の形成に及ぼした初期江南仏教の影響についての研究　800
神塚淑子（名古屋大学）

●六朝道教における死霊観の変遷と墓葬制への影響に関する比較宗教史的研究　600
菊池章太（東洋大学）

●清朝中国ムスリム学者劉智『天方性理』におけるミクロコスモスと世界認識　1,200
青木　隆（日本大学）

●明治前期における日中文化往来の研究―筆談資料と旅行記の整理・研究を中心として　1,300
陳　　捷（国文学研究資料館）

●大乗佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究　2,200
荒牧典俊（京都光華女子大学）

●中国北朝墓誌工房の基礎的研究　900
澤田雅弘（大東文化大学）

●日中両国の初等・中等教育における漢字・漢文教育の比較研究　1,000
李　長波（京都大学）

●批注の体例―近世中期上方における明清漢籍受容の展開―　1,100
稲田篤信（首都大学東京）

●林羅山を中心とした江戸初期儒学者の日本古典文学研究についての考察　700
川平敏文（熊本県立大学）

●近代中国の口語散文に与えた日本文学の影響—周作人の日本文学受容をめぐって— 1,600
顧　偉良(弘前学院大学)

●新井白石『陶情詩集』の研究 1,300
詹　満江(杏林大学)

●日本および周辺地域に波及した祝穆編書の版本研究—建陽坊刻類書の伝播に関する考察— 1,200
住吉朋彦(慶應義塾大学)

●近世日本漢詩総集『日本詩選』についての総合的研究 1,200
高島　要(石川工業高等専門学校)

●中世儒学史・政治史資料としての年号改元文献の研究 1,800
小川剛生(国文学研究資料館)

●宋人題跋の文学的研究 700
西上　勝(山形大学)

●「芸術区」を中心とした中国都市文化の地域比較研究 1,500
牧　陽一(埼玉大学)

●現代中国における審美主義 1,200
伊藤徳也(東京大学)

●江戸期著述の詩話の整理及び江戸時代の中国古典文学研究に対する多面的考察 700
道坂昭廣(京都大学)

●江戸末期に日本に伝わった中国伝統演劇に関する基礎的研究 1,800
赤松紀彦(京都大学)

●1940年代中国圏における文学の複数性—地域・メディア・制度の視角から 1,200
今泉秀人(大阪大学)

●石刻復元資料による柳宗元を中心とした唐代文学の文理融合型研究 1,500
戸崎哲彦(島根大学)

●日本現存『白氏文集』那波本諸本の調査収集と諸本の比較研究 500
下定雅弘(岡山大学)

●山口大学所蔵和漢古典籍の書誌学的研究と分類目録の作成 700
根ヶ山徹(山口大学)

●明代家刻本と白話小説:清平山堂を例として 500
中里見敬(九州大学)

●豊子愷に関する比較文学的研究 1,100
西槙　偉(熊本大学)

●日本統治期台湾における「大衆文学」研究—探偵小説を中心に 1,000
星名宏修(琉球大学)

●漢代五言詩歌の伝播とその文学的昇華の過程に関する研究 600
柳川順子(県立広島大学)

●李頎詩の研究—盛唐士人を描写した詩をめぐって— 500
川口喜治(山口県立大学)

●18・19世紀の日中比較文学研究—頼氏・齋藤拙堂・眞龍院を中心に— 700
直井文子(東京成徳大学)

●中国古典戯曲総合データベースの発展的研究 1,500
千田大介(慶應義塾大学)

●柳宗元の古文研究—訓読と解釈— 1,100
黒田真美子(法政大学)

●日本伝存典籍による漢籍佚文の輯集と研究 900
河野貴美子(早稲田大学)

●中国近世唱導文藝研究—江南地域における実態調査 1,200
松家裕子(追手門学院大学)

●台湾原住民族における言語環境の変移および言語転換(日本語から中国語へ)の実相 1,700
下村作次郎(天理大学)

●乾隆朝初期における杭州詩人集団の研究 800
市瀬信子(福山平成大学)

●崑曲音律及び草創期太倉地区崑曲家研究 1,100
小川保博(長崎総合科学大学)

●中国語における補語構造の非対称性に関する歴史的研究 600
伊原大策(筑波大学)

●戦国簡牘文字の地域差に関する基礎的研究 600
福田哲之(島根大学)

●「切字釈疑」訳注 300
富平美波(山口大学)

●『国語』の版本と校勘学の研究 1,100
小方伴子(首都大学東京)

●徳川儒学思想における明清交代—政治と学問の〈正統性〉評価の変遷 1,100
眞壁　仁(北海道大学)

●古代日本列島における漢字文化受容の地域的特性の研究 1,300
佐藤　信(東京大学)

●中国法典・文物伝来からみた律令制形成過程の再検討 700
大隅清陽(山梨大学)

●漢方腹診書・鍼灸流儀書に関する書誌研究 1,600
長野　仁(神戸大学)

●唐代地方社会の祭祀儀礼の研究 1,200
江川式部(明治大学)

●「日書」よりみた地域文化と中国文明 1,200
工藤元男(早稲田大学)

基盤研究(C)　継続

●漢訳西洋暦算書の基礎調査と近世国学者への影響に関する研究 600
小林龍彦(前橋工科大学)

●近代中国における漫画の形成と漫画表象のジェンダー観点からの研究 900
坂元ひろ子(一橋大学)

●日本儒教に関する倫理学・倫理思想史的研究—近代化論と比較思想史的研究の統合 1,000
高島元洋(お茶の水女子大学)

●唐宋心性思想に関わるデータベース構築の試み 500
坂内栄夫(岐阜大学)

●ベルリン・トルファン・コレクションの漢語版本の綜合研究 500
西脇常記(同志社大学)

●五経正義の総合的研究 1,000
野間文史(広島大学)

●『大戴礼記』に残存する『曾子』十篇についての基礎的研究 500
末永高康(鹿児島大学)

●「洞神經」の基礎的研究 500
山田　俊(熊本県立大学)

●『論語義疏』古抄本の研究 600
影山輝國(実践女子大学)

●明代教派系宝巻形成の研究—嘉靖萬暦の宗教故事の摂取を焦点に— 900
磯部　彰(東北大学)

●宋代道教儀礼書と現代台湾の道教儀礼 1,400
松本浩一(筑波大学)

●術数書と陰陽五行説の中世的展開 1,200
武田時昌(京都大学人文科学研究所)

●永楽三大全の基礎的研究 900
鶴成久章(福岡教育大学)

●中国古代における太陽とロータスと鳥の図像的イメージと神仙思想 800
大形　徹(大阪府立大学)

●術数書の基礎的文献学的研究 2,000
三浦国雄(大東文化大学)

● 中国初期禅宗史と大乗戒運動 600
中島志郎（花園大学）

● 隋唐時代における道観の基礎的研究 700
都築晶子（龍谷大学）

● 柳詒徵とその周辺—東南大学知識人の発展的研究— 500
野田善弘（新居浜工業高等専門学校）

●『婆沙論』の総合的研究 700
佐々木閑（花園大学）

● 律蔵関連文献の総合研究 900
山極伸之（佛教大学）

●『中観明句論註釈』の文献学的研究によるインド・チベット中観仏教思想史の再構築 900
吉水千鶴子（筑波大学）

● 慧均『大乗四論玄義記』に基づく中国南朝仏教学の再構築 900
菅野博史（創価大学）

● 日本における宋代風水思想の受容と展開に関する研究 700
鈴木一馨（（財）東方研究会）

● 東アジアにおける漢訳西学書の成立、伝播とその影響に関する思想史的研究 700
李　梁（弘前大学）

● 中国イスラーム山東学派におけるスーフィー哲学の受容と変容の研究 700
松本耿郎（聖トマス大学）

● 中国の伝奇小説と日本の物語文学に関する比較文化的研究 800
山本登朗（関西大学）

● 中世前期貴族社会における漢詩文の基礎的研究 500
仁木夏実（大阪大学）

● 中国宋代における別集の編纂に関する文学論的・社会文化論的研究 800
浅見洋二（大阪大学）

● 中国民間演劇の再興—江蘇省を中心として— 700
磯部祐子（富山大学）

● 日中戦争期における香港文学者と日本・中国文学者の関係図 700
西野由希子（筑波大学）

● 中国舟山の人形劇に見る口承文藝の研究—「説唐」故事を中心に— 800
橋谷英子（馬場英子）（新潟大学）

● 表音文字による中国語書写の歴史的研究 800
高田時雄（京都大学人文科学研究所）

● 明清寓言の多様性に関する総合的研究 900
佐藤一好（大阪教育大学）

● 明清における非古の文体と家族・ジェンダー 900
野村鮎子（奈良女子大学）

● 白居易を中心とする中唐「風流」文学の展開に関する研究 600
諸田龍美（愛媛大学）

● 敦煌文献中にみられる説話文学資料の基礎的研究 1,200
荒見泰史（広島大学）

● 植民地期旧「満洲」地域における朝鮮人文学者たちの活動研究 500
布袋敏博（早稲田大学）

●『元朝秘史』研究における文学研究の構築—モンゴル英雄叙事詩研究を土台として— 600
藤井麻湖（愛知淑徳大学）

● 杜甫の詩語に関する基盤的研究 500
後藤秋正（北海道教育大学）

● 収録字の配列方法より考察した中国辞書史の研究 1,600
花登正宏（東北大学）

● 魏晋六朝文学における美と聖性 400
佐竹保子（東北大学）

● 中国近代書論の文献学的研究 700
菅野智明（筑波大学）

● 前漢書平話前集・後集の復元を通して見た全相平話 800
大塚秀高（埼玉大学）

● 日本現存朝鮮古刊本の調査とその語学的・書誌学的研究 1,000
藤本幸夫（麗澤大学）

● 1920年代、北京を中心とした文学結社の活動 700
齊藤大紀（富山大学）

● 明代詩賛系文学の基礎的研究 1,000
高橋文治（大阪大学）

● 口承性から見た漢代文学の研究 600
釜谷武志（神戸大学）

● 戦国秦漢期の諺・歌謡・文学作品と物語—「テキスト」を核とした「語り」の展開— 500
谷口　洋（奈良女子大学）

● 中国古小説の話題事項集成 600
富永一登（広島大学）

● 湖北省の無形文化財「漢川善書」における聖諭宣講の継承発展に関する総括的調査研究 1,200
阿部泰記（山口大学）

● 上海の歴史文化地図の改訂制作とその活用 500
木之内誠（首都大学東京）

● 中国語文化圏における厨川白村著作の受容の再燃現象についての研究 1,200
工藤貴正（愛知県立大学）

● 日中説話文学史構築のための『法苑珠林』『夷堅志』の比較説話学的研究 1,000
三田明弘（日本女子大学）

● 唐代著述考 700
孫　猛（早稲田大学）

● 韋君宜から見た中国革命史再構築の試み—作家、編集者、革命家の視点から 900
楠原俊代（同志社大学）

● スペイン国内に残る中国近世白話文献の学術的価値に関する研究 400
井上泰山（関西大学）

● 申報掲載文明戯劇評の研究 900
瀬戸　宏（摂南大学）

● 中国東南方言資料による「文法化」に関する記述的研究 900
佐々木勲人（筑波大学）

● 中国語普通話文法の形成及び多様性に関する基礎研究 500
町田　茂（山梨大学）

● 訓読語詞の比較研究 500
春田晴郎（東海大学）

● 清朝の言語政策と社会変動に係わる漢語の多層性に関する研究—公用語の脈流を視座に— 800
藤田益子（新潟大学）

● 現代中国語における空間認識に関する体系的研究 400
丸尾　誠（名古屋大学）

● 北京新出資料から見る清代口語の諸相 1,000
落合守和（首都大学東京）

● 音韻と文法のインターフェースからの中国語の類型的特徴の再検討 1,100
太田　斎（神戸市外国語大学）

● アジア諸言語における喉頭特徴の相関 1,100
遠藤光暁（青山学院大学）

● 近世漢文訓読語法の日本語史的研究 500
齋藤文俊（名古屋大学）

● 鎌倉時代における日本漢音の位相的研究 1,300
佐々木勇（広島大学）

● 昭和前期日本の社会・文化史と台湾—台湾知識人精神史の記録化 500
大谷　渡（関西大学）

● 明代出版史の定量的分析を可能にするための日本現存明版書誌研究 1,000
井上　進（名古屋大学）

●中国古代即位儀礼の研究　600
松浦千春（一関工業高等専門学校）

●敦煌・トルファン漢語文献の特性に関する研究　500
土肥義和（（財）東洋文庫）

●西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究　1,400
荒川慎太郎（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

●二十一世紀の漢文教育テキスト作成～長崎から世界へ　1,700
荒木龍太郎（活水女子大学）

萌芽研究　新規

●『医心方』所引の仏教関連書籍から見る東アジアの仏教医学伝播の諸相　1,300
多田伊織（皇學館大学）

萌芽研究　継続

●謚法に見られる人物評価意識の変遷　500
三上英司（山形大学）

●元刻文字資料による元代口語文法の再構築―古代・近代両漢語文法の統一的理解のために　1,000
小池一郎（同志社大学）

若手研究（スタートアップ）　新規

●道教における異常死者救済儀礼の研究―台湾南部地域を中心として―　1,140
山田明広（関西大学）

●1930年前後中国における歴史学の形成：学術の同時代思想史　600
竹元規人（福岡教育大学）

●元・明時期における演劇と庶民文芸との影響関係の解明と文学史的位置づけの分析的研究　1,080
伴　俊典（早稲田大学）

●明末清初の白話短編小説集の出版および収録に関する研究　1,380
廣澤裕介（立命館大学）

●中国口語起源漢語を含む漢文の訓読の実証的研究　1,190
唐　　イ（北海道大学）

●台湾南部客家語の記述的研究　660
小川俊輔（広島経済大学）

若手研究（スタートアップ）　継続

●懐徳堂の「知」の生産―儒学を中心とした知識人の繋がり　1,090
池田光子（大阪大学）

●四川漢代石闕にみる儒教的図像の地域的受容と展開　900
楢山満照（早稲田大学）

奨励研究

●『滄浪詩話』おける「興趣」の研究　580
須山哲治（早稲田大学）

●宝巻文学と中国女性文化との関わりについての研究　490
辻　リン（早稲田大学）

研究成果公開促進費

●ACTA ASATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture　2,000
（（財）東方学会）

●室町時代古鈔本『論語集解』の研究　1,200
高橋　智（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）

●易学哲学史　1,200
近藤浩之（北海道大学）

●道家・道教の思想とその方術の研究　1,600
坂出祥伸（関西大学）

●道家思想の新研究―『荘子』を中心として　4,200
池田知久（大東文化大学）

●帰有光文学の位相　1,400
野村鮎子（奈良女子大学）

●近代中国における民俗学の系譜　1,300
子安佳代子（中央大学）

●呉昌碩研究　1,000
松村茂樹（大妻女子大学）

●敦煌文書にみる学校教育　1,300
伊藤美重子（お茶の水女子大学）

●統辞論における中国語名詞句の意味と機能　900
小野秀樹（首都大学東京）

●東アジアにおける言語接触の研究　2,800
寺村政男（大東文化大学）

●中国石刻関係図書目録（1949―2007前半）―附『石刻史料新編』（全4輯）書名・著者索引　800
高橋継男（東洋大学）

●日本古典籍総合目録（UECJB）　2,000
鈴木　淳（日本古典籍総合目録作成グループ）

●日本現存朝鮮古書データベース（DOKB）　2,800
藤本幸夫（麗澤大学朝鮮古書データベース作成チーム）

●新・全国漢籍データベース（KANSEKI）　4,800
井波陵一（全国漢籍データベース作成委員会）

●東洋学多言語資料のマルチメディア電子図書館情報システム（ISMDLMAS）　8,000
斯波義信（東洋文庫電算化委員会）

●「東洋文庫所蔵」図像史料マルチメディアデータベースシステム（MULTIDB-TBHP）　4,800
小野欽司（図像史料マルチメディアDB作成委員会）

●漢字字体変遷研究のための拓本文字データベース（djvuchar）　6,500
安岡孝一（拓本文字データベース作成委員会）

日本中国学会　平成19年(2007年)度 収支決算書

(単位：円)

	科目	予算	決算	概要	
収入の部	1．前年度繰越	¥10,357,311	¥10,357,311		—
	2．会員会費	¥12,000,000	¥11,591,000		¥-409,000
	3．寄付金	¥1,000,000	¥1,103,450		¥103,450
	4．預金利息	¥3,000	¥7,131		¥4,131
	5．著作権料分配金	¥0	¥27,000		¥27,000
	総計	¥23,360,311	¥23,085,892	(A)	¥-274,419

	科目	予算	決算	概要	
支出の部	1．事務局総務費	¥3,280,000	¥2,629,918	(1)～(7)	¥650,082
	(1) 印刷費	¥1,400,000	¥1,498,907		¥-98,907
	(2) 通信費	¥1,000,000	¥567,873		¥432,127
	(3) 交通費	¥70,000	¥63,460		¥6,540
	(4) 消耗品費	¥200,000	¥24,195		¥175,805
	(5) 庶務処理費	¥100,000	¥14,474		¥85,526
	(6) 雑費	¥300,000	¥251,009	うち振込手数料等 ¥143,710	¥48,991
	(7) 業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
	2．事務局人件費	¥1,860,000	¥1,470,000	(1)(2)	¥390,000
	(1) 幹事手当	¥360,000	¥360,000		¥0
	(2) 謝金	¥1,500,000	¥1,110,000		¥390,000
	3．事務局会議費	¥400,000	¥614,463	(1)(2)	¥-214,463
	(1) 会議費	¥100,000	¥140,933		¥-40,933
	(2) 役員旅費	¥300,000	¥473,530		¥-173,530
	4．事業費	¥6,700,000	¥6,046,213	(1)(2)	¥653,787
	(1) 学会報等刊行費	¥5,500,000	¥4,846,213		¥653,787
	イ．印刷費	¥3,000,000	¥2,536,598	学会報及び名簿	¥463,402
	ロ．編集費	¥1,600,000	¥1,600,000		¥0
	ハ．翻訳謝金	¥300,000	¥280,000	英文要旨作成	¥20,000
	ニ．発送費	¥600,000	¥429,615	モリモト印刷業務委託等	¥170,385
	(2) 学術大会運営費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0

	科目	予算	決算	概要	
支出の部	5．各種委員会運営費	¥2,060,000	¥1,867,202	(1)～(6)	¥192,798
	(1) 大会委員会	¥15,000	¥10,605		¥4,395
	イ 通信費	¥5,000	¥5,000		¥0
	ロ 会議・旅費	¥0	¥0		¥0
	ハ 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ 消耗品・雑費	¥5,000	¥605		¥4,395
	(2) 論文審査委員会	¥630,000	¥565,686		¥64,314
	イ 通信費	¥140,000	¥109,720		¥30,280
	ロ 会議・旅費	¥400,000	¥364,400		¥35,600
	ハ 謝金	¥60,000	¥60,000		¥0
	ニ 消耗品・雑費	¥30,000	¥31,566		¥-1,566
	(3) 出版委員会	¥400,000	¥396,380		¥3,620
	イ 通信費	¥30,000	¥16,050		¥13,950
	ロ 会議・旅費	¥250,000	¥270,120		¥-20,120
	ハ 謝金	¥30,000	¥30,000		¥0
	ニ 学会便り編集費	¥80,000	¥80,000		¥0
	ホ 消耗品・雑費	¥10,000	¥210		¥9,790
	(4) 選挙管理委員会	¥65,000	¥42,570		¥22,430
	イ 通信費	¥5,000	¥240		¥4,760
	ロ 会議・旅費	¥30,000	¥22,120		¥7,880
	ハ 謝金	¥20,000	¥20,000		¥0
	ニ 消耗品・雑費	¥10,000	¥210		¥9,790
	(5) 研究推進・国際交流委員会	¥130,000	¥20,000		¥110,000
	イ 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ロ 会議・旅費	¥100,000	¥0		¥100,000
	ハ 謝金	¥20,000	¥20,000		¥0
	ニ 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
	(6) 将来計画特別委員会	¥240,000	¥250,452		¥-10,452
	イ 通信費	¥5,000	¥220		¥4,780
	ロ 会議・旅費	¥200,000	¥230,232		¥-30,232
	ハ 謝金	¥30,000	¥20,000		¥10,000
	ニ 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
	(7) ホームページ特別委員会	¥580,000	¥581,509		¥-1,509
	イ 通信費	¥10,000	¥101,120		¥-91,120
	ロ 会議・旅費	¥50,000	¥90,872		¥-40,872
	ハ 謝金	¥20,000	¥20,000		¥0
	ニ ホームページ管理費	¥500,000	¥369,517		¥130,483
	1～5	¥14,300,000	¥12,627,796		¥1,672,204
	予備費	¥9,060,311	—		
	合計	¥23,360,311	¥12,627,796	(B)	¥10,732,515
	次年度繰越金		¥10,458,096	(A)収入差額＋(B)支出差額	
	総計	¥23,360,311	¥23,085,892		

学会基金

収入の部	基本金	4,300,000	支出の部	基本金	4,300,000	備考(基本金内訳)	奥野基金 500,000
	前年度繰越金	¥1,087,951		日本中国学会賞	¥160,000		佐藤基金 200,000
	預金利息	¥9,153		次年度繰越金	¥939,196		池田基金 300,000
	信託収益金	¥2,092					伊藤基金 300,000
	合計	¥1,099,196		合計	¥1,099,196		積立基金 3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。　平成20年5月12日

日本中国学会監事

林克　安藤信廣　大木康

日本中国学会　平成20年（2008年）度収支予算

（単位：円）

	科目	予算案
収入の部	1．前年度繰越	¥10,458,096
	2．会員会費	¥12,000,000
	3．寄付金	¥1,000,000
	4．預金利息	¥3,000
	5．著作権料分配金	¥0
	合計	¥23,461,096

	科目		予算案
支出の部	1．事務局総務費	（1）～（7）	¥3,280,000
	（1）印刷費	「便り」・封筒・投票用紙印刷を含む	¥1,400,000
	（2）通信費	「便り」・投票用紙発送を含む	¥1,000,000
	（3）交通費		¥70,000
	（4）消耗品費		¥200,000
	（5）庶務処理費		¥100,000
	（6）雑費	振込手数料および対外費を含む	¥300,000
	（7）業務委託料		¥210,000
	2．事務局人件費	（1）（2）	¥1,860,000
	（1）幹事手当		¥360,000
	（2）謝金	事務局専従謝金を含む	¥1,500,000
	3．事務局会議費	（1）（2）	¥400,000
	（1）会議費		¥100,000
	（2）役員旅費		¥300,000
	4．事業費	（1）（2）（3）	¥9,700,000
	（1）学会報等刊行費	イ～ニ	¥5,500,000
	イ．印刷費	学会報及び名簿	¥3,000,000
	ロ．編集費		¥1,600,000
	ハ．翻訳謝金	英文要旨作成	¥300,000
	ニ．発送費		¥600,000
	（2）学術大会運営費		¥1,200,000
	（3）60年記念事業費	60年記念講演会・記念CD・顧問懇談会	¥3,000,000

	科目	予算案
支出の部	5．各種委員会運営費	¥2,235,000
	（1）大会委員会	¥15,000
	イ　通信費	¥5,000
	ロ　会議・旅費	¥0
	ハ　謝金	¥5,000
	ニ　消耗品・雑費	¥5,000
	（2）論文審査委員会	¥630,000
	イ　通信費	¥140,000
	ロ　会議・旅費	¥400,000
	ハ　謝金	¥60,000
	ニ　消耗品・雑費	¥30,000
	（3）出版委員会	¥400,000
	イ　通信費	¥30,000
	ロ　会議・旅費	¥250,000
	ハ　謝金	¥30,000
	ニ　学会便り編集費	¥80,000
	ホ　消耗品・雑費	¥10,000
	（4）選挙管理委員会	¥240,000
	イ　通信費	¥10,000
	ロ　会議・旅費	¥150,000
	ハ　謝金	¥60,000
	ニ　消耗品・雑費	¥20,000
	（5）研究推進・国際交流委員会	¥130,000
	イ　通信費	¥5,000
	ロ　会議・旅費	¥100,000
	ハ　謝金	¥20,000
	ニ　消耗品・雑費	¥5,000
	（6）将来計画特別委員会	¥240,000
	イ　通信費	¥5,000
	ロ　会議・旅費	¥200,000
	ハ　謝金	¥30,000
	ニ　消耗品・雑費	¥5,000
	（7）ホームページ特別委員会	¥580,000
	イ　通信費	¥10,000
	ロ　会議・旅費	¥50,000
	ハ　謝金	¥20,000
	ニ　ホームページ管理費	¥500,000
	1～5	¥17,475,000
	予備費	¥5,986,096
	合計	¥23,461,096

学会基金

	基本金	4,300,000
収入の部	前年度繰越金	¥939,196
	預金利息	¥3,000
	信託収益金	¥1,000
	合計	¥943,196

	基本金	4,300,000
支出の部	日本中国学会賞	¥160,000
	次年度繰越金	¥783,196
	合計	¥943,196

備考（基本金内訳）		
	奥野基金	500,000
	佐藤基金	200,000
	池田基金	300,000
	伊藤基金	300,000
	積立基金	3,000,000

平成20年度学会員動向

●会員動向（平成20年11月１日現在）
総会員数1,941名、準会員数65機関、
賛助会員９社

●本年度『学会便り』第１号発行以来判明した、11月１日現在の物故会員は以下の通りです。

（敬称略）

北海道地区	丸尾　常喜
関東地区	宇野　精一
	鎌田　　正
	熊谷　尚夫
	櫻庭　和典
	深津　胤房
	村松　　暎
中部地区	谷田　孝之
近畿地区	清水　　茂
	芝田　　稔
	壺井　義正
九州地区	菰口　　治

●退会会員

○退会申出会員　35名

赤羽　義之	綾部　武彦	伊藤　　円
林　　泰弘	遠藤　光暁	王　　文亮
大方　高典	岡田　祥子	尾崎理恵子
加藤　　慧	木内　芳樹	項　　青
小酒井淑恵	小谷喜一郎	坂下由香里
鈴木　健之	田中　紀子	張　　明輝
陳　　洪傑	中川　直美	中川　裕三
中村　嘉弘	西牟田明徳	橋本　高勝
橋本　　堯	長谷川滋成	浜政　博司
平木　康平	松村　久子	宮本　　勝
棟方　　徳	森瀬　壽三	森野　繁夫
吉本　育代	渡辺　　恵	

○四年会費未納による退会会員　計22名

●住所不明会員　32名

荒木ラン子	韋　海英	武　宇林
植松　公彦	笈沼　恵一	王　京鈺
岡本　光生	小川　貴宏	後藤　淳一
小林　忠輝	佐伯　雅宣	佐藤　貢悦
島津　京淳	清水　篤	鈴木　康夫
角田　達朗	関　浩志	薛　羅軍
竹内　良雄	趙　立男	中山　歩
堀田　洋子	堀江　智子	槙　高志
宮内　四郎	山崎みどり	山島めぐみ
山田留美子	藍　恵子	李　彤
劉　柏林	和賀井　聡	

※上記会員の連絡先をご存知の方は、お手数ですが、事務局までご一報ください。

平成20年度新入会員一覧

10月10日開催の評議員会で入会が承認されたのは、以下の通りです。

●通常会員　20名

相原　里美　近畿地区　関西外国語大学
阿部　　亘　関東地区　早稲田大学（院）
伊香賀　隆　関東地区　東洋大学（院）
潮田　　央　関東地区　国学院大学（院）
尾川　明穂　関東地区　筑波大学（院）
奥野新太郎　九州地区　九州大学（院）
恩塚　貴子　国外　台湾大学（院）
下田　章平　関東地区　筑波大学（院）
蕭　　涵珍　関東地区　東京大学（院）
蔣　　垂東　関東地区　文教大学
叢　　小榕　東北地区　いわき明星大学
高橋　佑太　関東地区　筑波大学（院）
高山　大毅　関東地区　東京大学（院）
常廣　　徹　関東地区　国学院大学（院）
董　　偉華　近畿地区　立命館大学（院）
播本　崇史　関東地区　東洋大学（院）
堀　　史人　近畿地区　大阪大学（院）
丸井　　憲　関東地区　早稲田大学（非）・専修大学（非）
最上　桃子　関東地区　二松学舎大学（院）
和久　　希　関東地区　筑波大学（院）

尚、以下の６月入会者については、本年度の名簿に掲載されています。

●通常会員　25名

池田　智恵　池田　恭哉　石井　　理
元　　勇準　大戸　温子　加納留美子
木村　亮太　キング　ロバート
熊野　弘子　小島　明子　小林　瑞恵
三瓶はるみ　臧　　世俊　髙石　和典
田島　花野　橘　　千早　鄧　　芳
二ノ宮　聡　白　　雲飛　葉山　恭江
松崎　寛子　山口　博子　山本　　律
山脇　水園　林　　雪雲

●賛助会員　１名

株式会社　内山書店

大会委員会幹事交替

諸田　龍美 → 太田　　亨（2008年６月～）

会計報告に関する補足・お詫び

副理事長　竹下　悦子

10月に開かれました評議員会における会計報告に関しまして、評議員の方から数点のご指摘を受けました。また、配布資料に誤記があることも判明いたしました。ご指摘いただいた会計報告書の表記上の問題につきましては、その後検討を加え、以後より丁寧に分かりやすい表記に務めるよう改善を考えております。また誤記につきましては、その場で訂正、総会において正確なものを提示させていただきました。会計報告という重要な会務におきまして如上のような遺漏がございましたことを、執行部といたしまして厳しく受け止め反省いたしますとともに、ご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

学会基金についての補足説明

今回の京都大会の評議員会（平成20年10月10日）において、学会基金の現状に関するご質問がありました。その時の説明が不十分でしたので、ここにお詫び申しあげ、かつ若干の補足説明させていただきます。

2008年10月25日

日本中国学会理事会

1968年、故奥野信太郎先生のご遺族から、学会に対して、故人の生前の意志として50万円が寄付されました。そのお金をどのように活用していくかを話し合う中で、利子のみを経常費に遣うことが決まりましたが、1970年10月、「日本中国学会賞」を設けることとなりました。その後、佐藤震二先生、池田末利先生、伊藤漱平先生からも寄付が寄せられ、そこに学会から300万円を拠出して、総額430万円となる学会賞のための基金ができあがりました。

先日の評議員会では、その430万円が今もあるのかとのご質問が出ましたが、学会基金430万円は、そのまま学会の資産として、定期預金や公社債、貸付信託という形で保有しております。決算書の中の、「信託収益金」とは、公社債と貸付信託からの１年の収益金の合計であり、「預金利息」とは、定期預金に対する利息と、それらの収益金を管理する普通預金口座の預金高に対して支払われる預金利息を合わせたものです。

当初の合意どおり、毎年の学会賞の賞金（年２件、１件８万円。該当者なしの年もある）は、基金のお金そのものは動かさずに、そこから得られる収益金から捻出しております。かつては配当金・預金利息が支出を上回っていましたが、昨今の低配当・低金利によってこれらの収益金だけで学会賞の賞金をまかなうのが難しくなり、2006年度には一般会計より80万円を充填いたしました。2007年度末（2008年３月）の残高は109万9,916円です。

新役員一覧

日本中国学会　平成21・22年度役員構成

（五十音順）

理事長

池田　知久

副理事長

川合　康三　竹下　悦子

理　事

吾妻　重二　神塚　淑子　佐藤錬太郎
竹村　則行　土田健次郎　富永　一登
花登　正宏　平田　昌司　藤井　省三
堀池　信夫　渡邉　義浩

監　事

安藤　信廣　大木　康　加藤　敏

評議員

赤井　益久　阿川　修三　浅野　裕一
吾妻　重二　安藤　信廣　池田　秀三
池田　知久　市川　桃子　市来津由彦
井波　律子　岩佐　昌暲　植木　久行
謡口　明　内山　精也　宇野　茂彦
大上　正美　大木　康　大島　晃
岡崎　由美　尾崎　文昭　垣内　景子
加藤　国安　加藤　敏　釜谷　武志
神塚　淑子　川合　康三　木津　祐子
金　文京　合山　究　小島　毅
後藤　秋正　小松　建男　小南　一郎
坂元ひろ子　佐竹　保子　佐藤錬太郎
柴田　篤　白水　紀子　杉山　寛行
高木　重俊　竹下　悦子　竹村　則行
土田健次郎　戸倉　英美　富永　一登
中嶋　隆藏　野間　文史　野村　鮎子
花登　正宏　平田　昌司　藤井　省三
古屋　昭弘　堀池　信夫　松原　朗
松本　肇　三浦　國雄　三浦　秀一
向嶋　成美　吉田　公平　渡邉　義浩

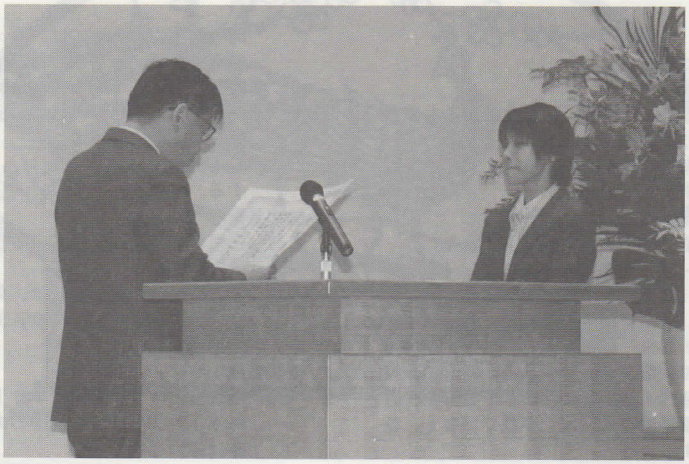
顧　問

荒木　見悟　石川　忠久　伊藤　漱平
今鷹　真　岡村　繁　加地　伸行
楠山　春樹　興膳　宏　戸川　芳郎
福井　文雅　本田　濟　町田　三郎
村山　吉廣　山下　龍二

幹　事

井川　義次　齋藤　希史

日本中国学会評議員会　平成20年10月10日確定



第60回大会における日本中国学会賞授賞式

京都大学時計台ホールにおける懇親会

The Sinological Society of Japan
NIPPON CHŪGOKU GAKKAI
Number.2
December
2008
Volume.14

「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中國學會

応募資格

1．日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2．応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし，未公開のものに限る。
ただし，口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3．原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。

4．原稿枚数は，本文・注・図版等をあわせて，400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙１マスに１字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはＡ４、１行30字毎ページ40行、文字は10．５ポイントを用いる。なお、第１ページの見易い場所に、投稿原稿を１行20字毎ページ20行に変換した場合の枚数を明記すること。原稿量の上限は、字数ではなく、枚数によるので注意すること。

5．図版を必要とする場合，占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙２枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし，掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6．原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては，論文審査委員会の議を経て，横書きを認めることがある。

7．引用文は内容に応じて原文，訳文，書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を，訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示すること。
ただし，一読して疑問の生ずる余地がないものについては，省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。
校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては，原文のみ引用することを妨げない。
原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので，訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが，加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。

8．原稿は正漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を正漢字体（旧字）に統一する。
活字は本文９ポイント，括弧内は８ポイントを，注はすべて８ポイントを使用する。
特に本文括弧内を９ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は，当該箇所に明記すること。

9．注は，各章・節ごとにつけず，通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いないこと。

10．中国語のローマ字表記は，執筆者の選択にゆだねるが，同一論文中にあっては，ウェード式・漢語拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし，特殊な綴りで通用している固有名詞（例　孫逸仙　Sun Yat-sen），本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。
日本語のローマ字表記は，ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11．応募時の原稿には400字５枚以内の論文要旨を添付する。

12．学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字３枚（1200字）程度の日本語要旨を添付すること。

原稿提出

13．原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし，毎年１月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。
〒113-0034　東京都文京区湯島１－４－25　斯文会館内
日本中國學會

14．応募の際，審査を希望する部門（哲学・思想または文学・語学）の別を原稿第１ページに朱書すること。ただし，論文の内容により，両部門にわたる審査を希望することができる。

15．応募時には，本文・要旨とも複写コピーを用意し，計４部を提出する。（事故に備え，提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又，原稿は原則として返却しない。

校　正

16．執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り，必要最小限のものについてのみ認める。加筆・訂正の結果加算された印刷費は，執筆者の負担とすることがある。

抜　刷

17．掲載論文の執筆者に対しては，抜刷30部を贈呈する。抜刷の追加を希望する場合は，初校返送時に追加所要部数を連絡のこと。その分については，実費及び増加送料を本人負担とする。

その他

18．掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）
（平成13年５月13日修正）
（平成14年10月13日一部修正）
（平成15年10月５日一部修正）
（平成19年10月７日一部修正）
（平成20年５月17日一部修正）

編集：京都大学大学院文学研究科　川合康三　〒606-8501 京都市左京区吉田本町
発行：日本中國學會　〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内　FAX.03-3251-4853　振替口座：00160-9-89927